

高槻市文化財年報

平成7年度

I	埋蔵文化財の調査	1
1	平成7年度の調査	
2	調査の概要	
	高槻城三ノ丸跡の調査	中村 剛彰
		橋本 久和
	天川遺跡の調査	橋本 久和
II	文化財保護啓発事業	16
III	文化財の指定	18
IV	資料紹介	20
	中城遺跡出土銭について	橋本 久和
	熱ルミネッセンス年代測定法による今城塚古墳と	
	太田茶臼山古墳の築造年代の推定	三尾野重義
		森 大鬼
	天川遺跡出土瓦器椀・土師器皿の蛍光X線分析	
		三辻 利一

1997年2月

高槻市教育委員会

高槻市文化財年報

平成7年度

I 埋蔵文化財の調査

1 平成7年度の調査

平成7年度における土木工事にともなう埋蔵文化財発掘調査届出・通知件数は繰り越し分を含めて101件で、前年度よりやや増加している。調査件数は76件で前年度の72件と比べわずかに増加している。

届出別にみると、「個人住宅の増改築」が34件、道路・水路改修・下水道整備など主要な公共工事は12件で前年度とほぼ同じ割合である。次いで、「共同住宅」が8件で減少傾向にある。駐車場・倉庫等は1件、造成工事等は5件であり、本市における発掘調査は全体をとおして公共工事・民間の開発ともほぼ横ばい状態である(表1)。

遺跡別にみると、嶋上郡衙跡が36件と圧倒的に多く、ついで高槻城跡・天川遺跡・安満遺跡の順になっている(表2)。これら4遺跡は住宅密集地であるが、天川遺跡のように周囲にはまだ農地が残り、共同住宅等、農地からの転用がめだっている。また、これらの地域における個人住宅の建替えが活発なことを反映している。なお、平成7年度に実施した調査の概略については一覧表にまとめた(表3・4)。

表1 平成7年度 届出別調査件数

個人住宅	共同住宅	駐車場・倉庫等	造成工事等	道路・水路改修	上下水道整備	その他	計
34	8	1	5	4	8	16	76

表2 平成7年度 遺跡別調査件数

遺跡名	件数	遺跡名	件数	遺跡名	件数
嶋上郡衙跡	36	新池遺跡	1	古曽部遺跡	1
今城塚古墳	1	芥川遺跡	1	宮田遺跡	2
郡家本町遺跡	2	高槻城跡	6	慈願寺山遺跡	1
郡家今城遺跡	2	津之江南遺跡	1	安満遺跡	5
ツゲノ遺跡	1	上田部遺跡	1	天川遺跡	5
開鶏山古墳	1	芝生遺跡	1	梶原寺跡	1
氷室塚古墳	3	山陽遺跡	1	その他	2
		中城遺跡	1	合計	76

No.	通称名(地区)	所在地	届出者	用途	面積(m ²)	担当	調査期間	備考
1	嶋上郡新跡	今城町164-52	三反田 次男	自治会館建設	96	中村	7.4.6	遺構・遺物なし
2	84-D	郡家新町163-19	松岡 みどり	個人住宅建設	74.98	木曾	7.4.25	遺構・遺物なし
3	48-F	川西町一丁目956-19	沢脚 孝彦	個人住宅建設	52.48	木曾	7.5.12	遺構・遺物なし
4	5-G	郡家本町755-4	久保田 通夫	個人住宅建設	147.4	高橋	7.5.15	嶋上遺跡群20に掲載
5	4-G	郡家本町932-1	堀 きくえ	浄化槽設置	5	木曾	7.6.9	嶋上遺跡群20に掲載
6	26-D・H他	清福寺町912-1	高根市長	浄化槽設置		佐々木	7.6.26, 7.10	遺構面に遺せず
7	17-O	清福寺町810-4	大塚 悟	物置小屋改築	8	高橋	7.7.1	遺構面に遺せず
8	郡家新町494-1	下村 喜久治	共同住宅建設	610.81	木曾	7.7.14~7.28	土壌裏1基検出	
9	23-K・L	郡家新町405-406-407	吉岡建設㈱	事務所社員寮	1,500.81	鎌ヶ江	7.7.25~8.18	井戸・土壌など検出
10	65-D	郡家新町241-1	西田 邦造	個人住宅建設	175.85	中村	7.8.8~8.9	嶋上遺跡群20に掲載
11	74-K	郡家新町156-34	上田 好一	個人住宅建設	55.93	木曾	7.8.28	嶋上遺跡群20に掲載
12	35-J	郡家新町760-0の一部	松下電子工業㈱	貯水槽改築	29.15	橋本	7.8.21~10.16	遺構面に遺せず
13	48-B	川西町一丁目956-16	寺尾 清成	個人住宅建設	48.42	橋本	7.9.4	嶋上遺跡群20に掲載
14	4-N	郡家本町913-2	高根市長	集会所建設	122.5	橋本	7.9.11	遺構・遺物なし
15	75-A・E	郡家新町162-20の一部	岩本ヒロミ他	共同住宅建設	400	木曾	7.9.18	遺構・遺物なし
16	75-A・E	郡家新町162-20の一部	岩本ヒロミ他	個人住宅建設	438	橋本	7.9.18	嶋上遺跡群20に掲載
17	郡家新町464-1他	高根市長	下水道建設	2,014.5	木曾	7.9.28~8.3.31	遺構・遺物なし	
18	郡家新町60~65	高根市長	下水道建設	1,049	中村	7.10.9~8.3.31	遺構・遺物なし	
19	67-C	川西町一丁目1086-3他	小西 一光	個人住宅建設	114.99	橋本	7.10.20	嶋上遺跡群20に掲載
20	54-K・O	郡家新町354-4の一部	堤 浩二	個人住宅建設	209.52	橋本	7.11.6	嶋上遺跡群20に掲載
21	54-O	郡家新町354-4の一部	堤 雅巳	個人住宅建設	209.52	木曾	7.11.6	嶋上遺跡群20に掲載
22	67-K	川西町一丁目1087-20	渡辺 和夫	個人住宅建設	54.4	高橋	7.11.8	嶋上遺跡群20に掲載
23	64-I・J・K・L他	郡家新町地内	高根市長	下水道建設	650	木曾	7.11.14~8.3.31	遺構・遺物なし
24	75-M	今城町186-5	外山 重明	個人住宅建設	98.88	橋本	7.12.25	遺構・遺物なし
25	郡家新町405地先	吉岡建設㈱	下水道建設	127.68	木曾	8.1.19	遺構・遺物なし	
26	47-P	川西町一丁目974-1	高根市長	防災無線設置	1	高橋	8.1.27	遺構・遺物なし
27	48-F	川西町一丁目955-5他	山端 知	個人住宅建設	56.18	木曾	8.2.6	嶋上遺跡群20に掲載
28	14-D	郡家本町320	岩本 正子他	個人住宅建設	400	橋本	8.2.13	嶋上遺跡群20に掲載
29	郡家新町17~33	高根市長	下水道建設	961	高橋	8.2.15~3.31	遺構・遺物なし	
30	44-C	郡家新町344	服部 恒	農地復旧	4	高橋	8.2.19	嶋上遺跡群20に掲載
31	27-A	清福寺町911	長谷川 喜伯	農小屋建設	33	佐々木	8.2.20~2.29	遺構面に遺せず
32	38-H	清福寺町919-32	森田 三保子	個人住宅建設	58.47	木曾	8.2.28	嶋上遺跡群20に掲載
33	7-I・K, 17-A・B・F	清福寺町地内	高根市長	下水道建設	226.4	鎌ヶ江	8.3.15~3.31	遺構・遺物なし
34	38-C他	川西町一丁目地内	高根市長	下水道建設	537.9	高橋	8.3.15~3.31	遺構・遺物なし
35	47-B・C他	川西町一丁目974-1	高根市長	下水道建設		高橋	8.3.15	遺構面に遺せず
36	47-B・C他	川西町一丁目974-1	高根市長	校舎改修		高橋	8.3.15	遺構面に遺せず
37	今城塚古墳	郡家新町18	林 祐太郎	工事用仮設道路	27.5	高橋	7.7.7	遺構面に遺せず
38	郡家本町遺跡	郡家本町737他	高根市長	道路整備	65.9	橋本	7.12.4~8.3.31	包含確認

表3 平成7年度調査一覽(1)

No	遺跡名(地区)	所在地	届出者	用途	面積(m ²)	担当	調査期間	備考
39	郡家本町遺跡	郡家本町876-1	下村 正 人	個人住宅建設	35.6	木曾	8.3.19	遺構・遺物なし
40	郡家今城遺跡	郡家新町54-1	矢田 勝 史	個人住宅建設	212.49	橋本	7.6.7	縄上遺跡群20に掲載
41	"	郡家新町57	伊藤啓典・浩一	個人住宅建設	303.58	橋本	7.10.30	縄上遺跡群20に掲載
42	ツゲノ遺跡	永室町三丁目304他	永室町長 青木 昌	エレベーター設置	66.2	藤澤	7.6.28	遺構・遺物なし
43	關島山古墳	永室町六丁目1-55他	藤原 権 三	神社社殿改築	996.43	木曾	7.10.9	遺構・遺物なし
44	水室塚古墳	水室町二丁目568-1	坂本 信 一	個人住宅建設	125.63	木曾	7.8.7	縄上遺跡群20に掲載
45	"	水室町二丁目903-4	大 船 順 史	個人住宅建設	147.46	橋本	7.11.9	縄上遺跡群20に掲載
46	"	水室町二丁目586-3	三 浦 圭 子	個人住宅建設	187.14	木曾	7.12.21	縄上遺跡群20に掲載
47	新池遺跡	上土室一丁目56-3他	吉岡産業㈱	共同住宅	1,916.19	鎌ヶ江	7.7.18~0.8	古墳時代型穴住居検出
48	芥川遺跡	殿町55-6	吉田 修	駐 車 場	314	木曾	8.2.16	遺構・遺物なし
49	高根城跡	野見町443-15	中村 幸 人	個人住宅建設	85.14	中村	7.5.22~5.23	縄上遺跡群20に掲載
50	"	野見町1225-1他	新家 末 吉	個人住宅建設	81.77	中村	7.6.6~6.8	縄上遺跡群20に掲載
51	"	城内町1他	高根市長 公 福 整備		7,500	中村	7.6.9~8.7	本書に掲載
52	"	城内町1015-19	宇田川邦雄他	個人住宅建設	50.42	高橋	7.10.20	縄上遺跡群20に掲載
53	"	大手町1170-7	中本 作次郎	個人住宅建設	147.49	高橋	7.10.23	縄上遺跡群20に掲載
54	"	城内町3	高根市長	貯水槽設置	100	鎌ヶ江	8.2.13~2.15	溝状遺構・柱穴を検出
55	津之江南遺跡	津之江北町225-1他	高根市長	道路改修	130.8	高橋	8.1.16~2.8	包含層確認
56	上田郡遺跡	上田辺町936-1	保田 秋 次	事務所兼住宅	212.55	高橋	7.11.15	近世の福込など検出
57	芝生遺跡	芝生町西丁目1-1	高根市長 青木 昌	サッカー場改修	14,585	高橋	7.10.12~10.13	包含層確認
58	山陽遺跡	山手町二丁目地先他	大阪府知事	構築改築	600	高橋	8.1.19	遺構・遺物なし
59	古曾部遺跡	古曾部三丁目292-1・3	エフエフ建設㈱	無線通信局設置	215	高橋	7.11.27	遺構・遺物なし
60	宮田遺跡	宮田町西丁目地先	高根市長	下水道建設	370	高橋	7.7.17~8.3.31	遺構・遺物なし
61	"	宮田町三丁目32	門川義次・芳美	個人住宅建設	667	中村	7.10.16~11.2	縄上遺跡群20に掲載
62	慈願寺山遺跡	月見町935-3	興成建設㈱	共同住宅	13,535.23	高橋	7.6.5~9.19	古墳・方形周溝検出
63	安満遺跡	安満東の町403-8	久保 優 二	個人住宅建設	73.19	中村	7.5.16~5.17	縄上遺跡群20に掲載
64	"	安満東の町423	岩 井 喜久雄	個人住宅建設	570.98	木曾	7.5.30~5.31	縄上遺跡群20に掲載
65	"	八丁瀬町298-3他	㈱大滝工務店	共同住宅	861.69	中村	7.6.5~6.6	遺構・遺物なし
66	"	八丁瀬町252-3他	高根市長 青木 昌	トヨタハウス		佐々木	7.6.26~7.10	遺構・遺物なし
67	"	八丁瀬町154-17	小 松 弘 幸	個人住宅建設	104.87	木曾	8.3.14	遺構・遺物なし
68	天川遺跡	辻子一丁目286-1	塚本 洋 子	宅 地 造 成	1,434	橋本	7.4.5~5.31	本書に掲載
69	"	須賀町9	㈱東 研	宅 地 造 成	1,275	橋本	7.6.22	遺構・遺物なし
70	"	須賀町282-4他	㈱東 研	宅 地 造 成	938	橋本	7.6.22	遺構・遺物なし
71	"	須賀町294-1	㈱東 研	宅 地 造 成	309	橋本	7.6.22	遺構・遺物なし
72	"	辻子一丁目2-2	数 島 住 研㈱	宅 地 造 成	561.99	橋本	8.1.10	遺構・遺物なし
73	楓原寺跡	楓原一丁目287	西田 盛 造	個人住宅建設	16.2	木曾	8.8.29~8.31	遺構・遺物なし
74	中城遺跡	北昭和合町313-1	深谷 篤 男	個人住宅建設	200	橋本	7.6.1.11.30	縄上遺跡群20に掲載
75	三島寺遺跡	赤大路町11-1	東洋不動産㈱	共同住宅	7,065.11	橋本	7.7.26	遺構・遺物なし
76	天神の馬場跡	芥川一丁目16他	高根市長 青木 昌	再 開 発		橋本	7.9.26	遺構・遺物なし

表4 平成7年度調査一覧(2)

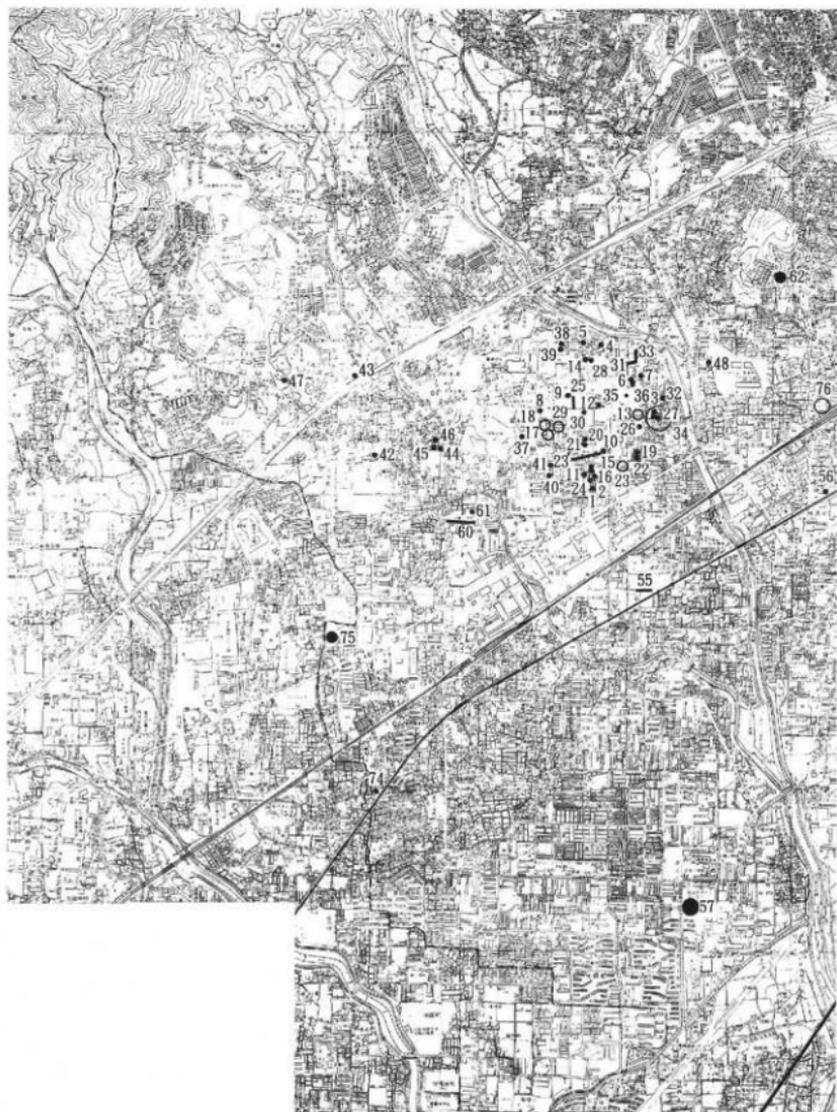
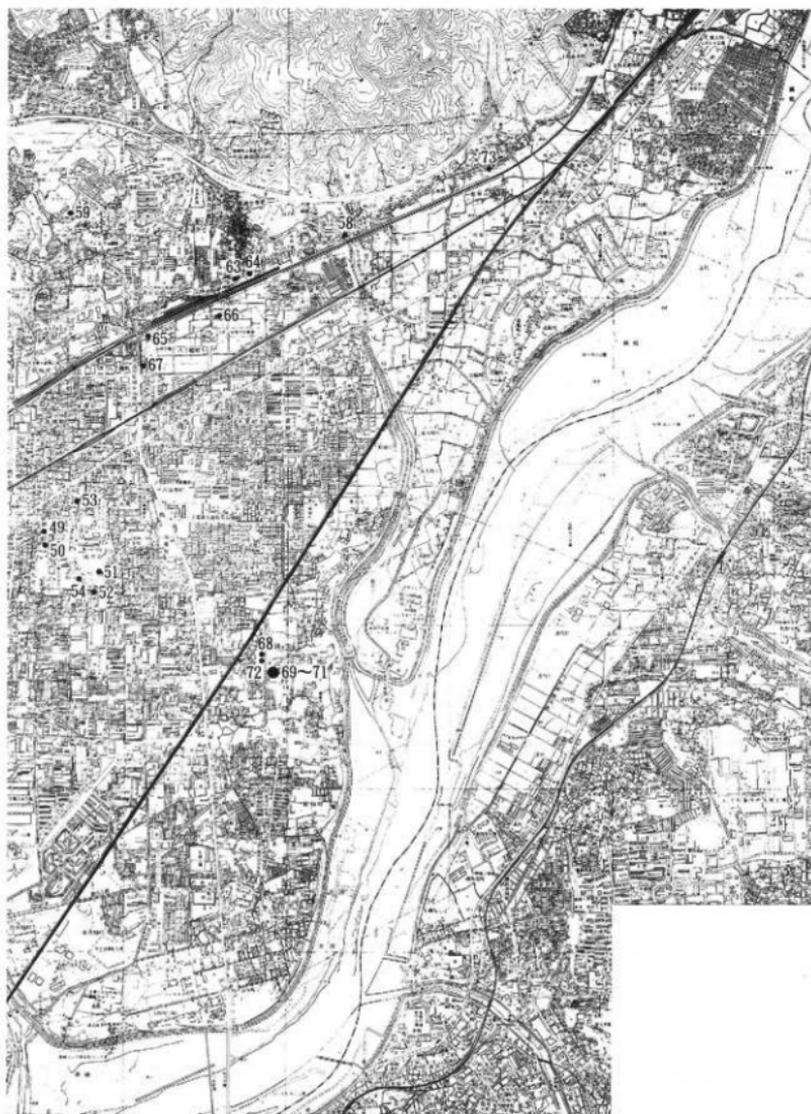


图1 埋藏文化財調査位置図



1 : 30000

2 調査の概要

高槻城三ノ丸跡の調査

中村 剛 彰

橋本 久 和

(1) はじめに

高槻城は市域中央部を流れる芥川の形成した扇状地の末端に位置している。ここに本格的な城が築かれたのは、和田惟政が入城した永禄年間(1569年頃)までさかのぼることができる。天正年間(1573年頃)には高山右近が城主となり、大改修を加え、広大な城を築いたといわれる。その後、元和3年(1617)には、江戸幕府による大規模な修築がおこなわれ、寛永年間(1635年頃)には出丸を西側に拡張するなど、何度も改修をうけている。



図1 調査位置図

かつての高槻城の姿は17世紀後半に描かれた絵図でうかがうことができるが、城は明治7年に取り壊され、現在では地名・道路などの町割りにその面影が残るのみとなっている。

しかし、昭和50年の本丸跡の調査以後、数々の発掘調査によって近世高槻城の実態や中世高槻城の規模や構造などが次第に明らかになってきている。今回の調査は公園整備に伴うもので、中・近世の高槻城関係の遺構の検出が予想されたため、平成7年6月9日から発掘調査を実施した。調査地は三ノ丸東地区にあたり、絵図にみられる三ノ丸御殿から東側にある武家屋敷の一部にあたるものと考えられる。

調査の結果、戦国時代から江戸時代初期にかけての溝・井戸・土壇・石敷遺構、江戸時代の井戸・導水施設、土壇などのほか、多数の柱穴を検出した(図版第1～3・図2)。とくに、導水施設は高槻城では、はじめての検出例である。

(2) 江戸時代以前の遺構

溝 溝は3条検出した。調査区南側で検出した溝1は東西方向で、幅2.5m、深さ0.55mを測り、東側へ直角に曲がり、調査区外へと延びる。西側は溝3により壊されている。溝2は調査区の東側で東西方向に検出し、幅3.6m、深さ0.76mを測る。溝の東側は北側に曲がったあと、調査区外に延び、西側は井戸、導水施設、石敷遺構などにより壊さ

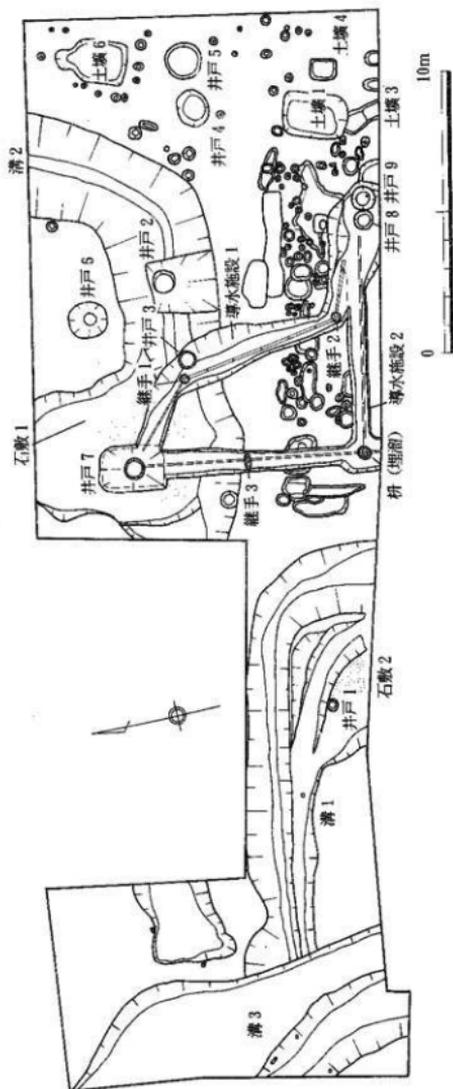


图2 高麗城三ノ丸跡遺構平面図

れている。自然堆積により埋没し、最後は江戸時代の整地土によって埋められている。溝3は調査区の西側で南北方向に検出し、幅約4m、深さ0.6mを測る。やはり江戸時代の整地土によって埋められている。掘削された順番は溝1→溝2→溝3で、備前焼・唐津焼・信楽焼・丹波焼・中国製陶磁器、瓦、木製品などが出土した。溝1・溝2は16世紀から17世紀にかけて、溝3は17世紀はじめに埋められたものと考えられる。

井戸 6基(井戸1～井戸6)検出したが、このうち井戸2・3・6は溝2埋没以降に掘削されている。また、他の井戸も湧水場所である溝の周辺で掘削された。内部から陶磁器や瓦などが出土している。

土壌 5基検出した。このうち土壌1・3・4は元和3年の築城時の整地土により埋められている。

石敷遺構 2箇所検出した。石敷遺構1は調査区北側、井戸7の周囲に約30㎡の範囲で検出した。拳大の石を敷き詰めた上に幅50cm前後、大きいものでは1mもの石を据えていることから、建物の基礎に関係するものかもしれない。石敷遺構2は溝1の南側で、約20㎡の範囲で検出した。この石敷には瓦や下駄も含まれていることから、溝の水を汲みあげた場所を護岸するための施設とみられる。

(3) 江戸時代の遺構

井戸 井戸は3基(井戸7～9)検出した。このうち、井戸7・8は導水施設に伴うものである。井戸7は調査区北東部で検出し、幅約0.7m、深さ2.7m以上を測る。井戸枠は桶を何段も重ねた構造で、内部から伊万里・瀬戸美濃などの陶磁器類、瓦、土製人形、寛永通宝、キセルの雁首、木製コマなどが出土している。井戸8・9は調査区東南部で検出した。井戸8は幅約0.7m、深さ1.2m以上を測り、井戸9により破壊されている。内部から、井戸枠部材や陶磁器・瓦が出土している。井戸9は幅約0.95m、深さ0.73m以上を測り、底には水を湧かせるために竹を地中深く差し込んでいた。井戸枠はすべて抜き取られ、陶磁器や墨書のある石が出土している。

導水施設 今回検出した導水施設は、新旧2時期ある。

導水施設1は真竹を使用した導水管(直径8cm)と松の丸太材を刳り貫いて作った継手を北側(継手1)、南側(継手2)の2箇所検出した。総延長は11.7mで、北側からそれぞれ3.2m、5.5m、3mである。なお、導水施設1は後に導水施設2に造り替えられている。この際、親井戸、溜井戸も同様に造り替えられている。継手には、導水管の接続面側に墨書が認められ、継手1の北西面には「井戸……(判読不能)」、南面には「南」、また継手2の北面にも判読不能なもの、文字と思われるものがみられる。

導水施設2では、親井戸(井戸7)、溜井戸(井戸8)、導水管(直径8cm)、継手

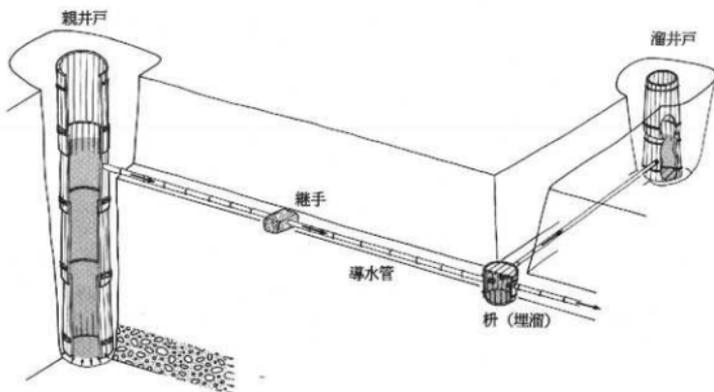


図3 導水施設2復元図

(継手3)、桶を転用した枡(埋溜)を検出した。導水管は親井戸から枡を介して東、南側に分岐し、東側の導水管は溜井戸へと配されている。親井戸から溜井戸間の総延長は約15mを測る。親井戸から枡間は約8mで、4mの地点で継手を使用している。枡から溜井戸間は約7mで継手は使用していない。

土壌 何基か検出しているが、伊万里・唐津などの陶磁器や土師器皿、漆碗などが出土した土壌6は長辺3m以上、短辺2.5m、深さ0.26mを測る隅丸方形でゴミ穴とみられる。

(4) 遺物

主な遺物としては室町時代から江戸時代にかけての陶磁器などが多量に出土している(図版第4)。主なものに土師器皿(1)、青磁稜花皿(2)、備前焼徳利(3)・鉢(4)、瀬戸美濃焼の皿(5)、唐津焼碗(7~9)、陶器鉢(6)、瓦質壺(10)などがあり、鋭意整理を進めている。

(5) まとめ

江戸時代の遺構として、高槻城の調査で初めて上水道の役割をもつ導水施設を検出し、この導水施設は元和3年(1617)の公儀修築時の整地層を掘り込んでいるため、17世紀前半以降の整備と考えられる。また、造り替えは、施設の老朽化が考えられるが、枡を埋設し南側へ導水管を延ばしており、しばしば城内の整備があったとみられる。

江戸時代以前の遺構も検出されているが、この時期は和田惟政または高山右近が在城していた。和田の城は不明であるが、高山の城(1573年頃)に関しては、惣構と呼ばれる堀や土塁が巡らされ、城内には農民や職人も居住した広大なものとみられ、検出された溝は城内を区切る役割をもっていたものかもしれない。

天川遺跡の調査

橋本久和

(1) はじめに

天川遺跡は1974年12月に北大冠水路西側で行われた自転車道建設工事に際して発見された遺跡で、約0.6mの遺物包含層が確認され、瓦器碗を中心とした中世土器が出土している。従来、遺跡周辺は水田地帯であったが、この数年間は宅地化が進行し、個人住宅の建設などに先立って発掘調査を実施している。

今回の調査地は辻子一丁目286-1にあたり、宅地造成工事が計画されたため発掘調査を実施したが、自転車道建設時に設定したトレンチの北西約50mの地点にあたる。調査の結果、溝や土壌など中世前期の遺構と遺物が出土したため、概要を報告する。



図1 調査位置図

1:5000

(2) 遺構・遺物

調査地は北大冠水路に沿った水田で、調査区の東側約5mは黄褐色砂礫が遺構面を削って南北方向に堆積している。整備される以前の北大冠水路である。また、調査区の北側約6mと南側の溝101以南では遺構面が削平されており、この部分では床土直下から灰褐色砂質土が堆積し、新しい時代に実施された耕地整理によるものとみられる。

基本的な層序は盛土(0.2~0.3m)、耕土(0.2m)、床土(0.05m)、灰褐色土(0.2~0.3m)、褐色土(0.2m)と堆積し、黄褐色砂質土上面で遺構が検出される。この黄褐色砂質土の厚さは約0.3mで、北西部では瓦器碗を若干含んでいる。下層は無遺物の青緑色砂質土で、遺構は確認されなかった。遺構は南北約20m、東西約13mの範囲で瓦器碗や土師器皿・杯が出土する溝、土壌、柱穴が検出された(図版5~7・図2)。

溝101~104は幅数10cmから1mで、深さ約0.1mを測り、溝103のみ矩形に曲がり、他は東西・南北方向に掘削されている。溝2は新しい時代のものである。

土壌1、2は長さ1.5m・幅約0.6m・深さ0.1mを測り、ほぼ東西方向に設けられた墓とみられる。土壌1からは副葬とみられる瓦器碗が出土している。

土壌3は調査区北西部で検出された不定形の摺鉢状落込で、南北約3m・東西約4m

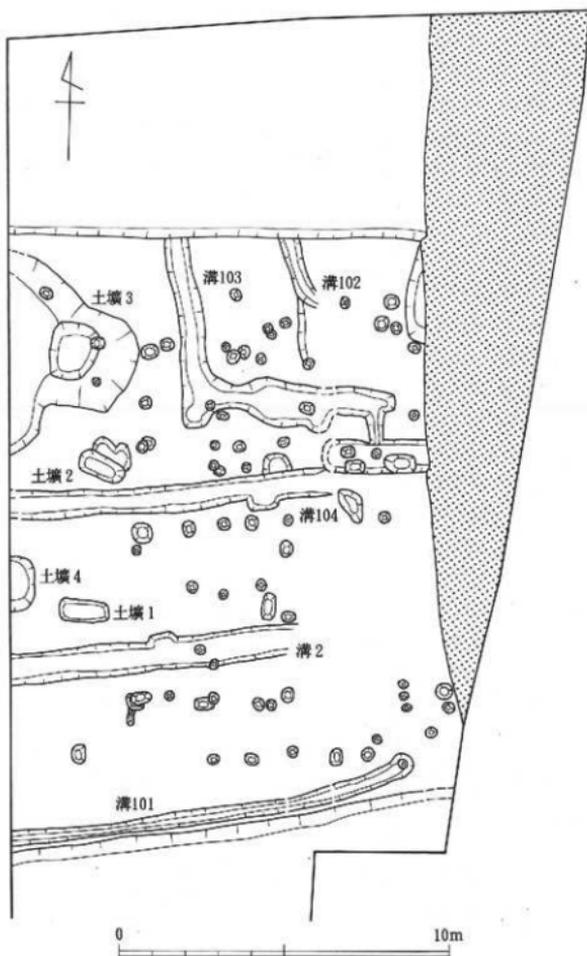


図2 天川遺跡遺構平面図

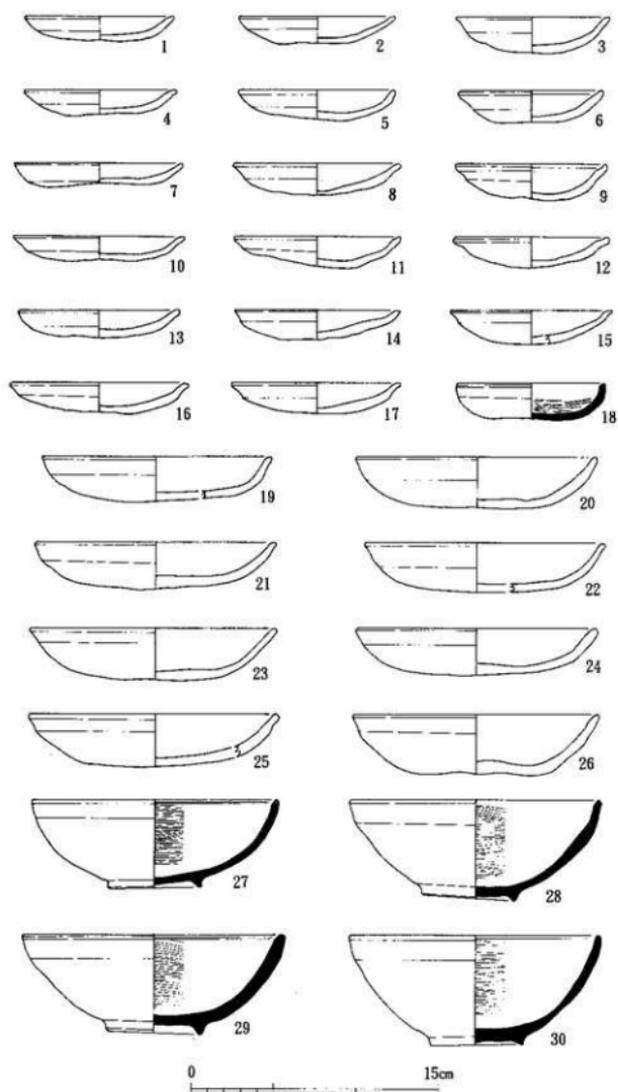


图3 土城3出土遺物

を測り、調査区の西側につづいている。深さ約0.4mを測り、瓦器碗、土師器皿・杯が多量に出土した。柱穴は直径0.3mから数十cmのものが調査区中央部で多数検出されたが、建物としてまとめることができなかった。

今回の調査では主に土壇3と褐色土から遺物が出土した。図版8・9、図3・4にまとめたように中世前期、とくに12世紀前後にほぼ限定できる。

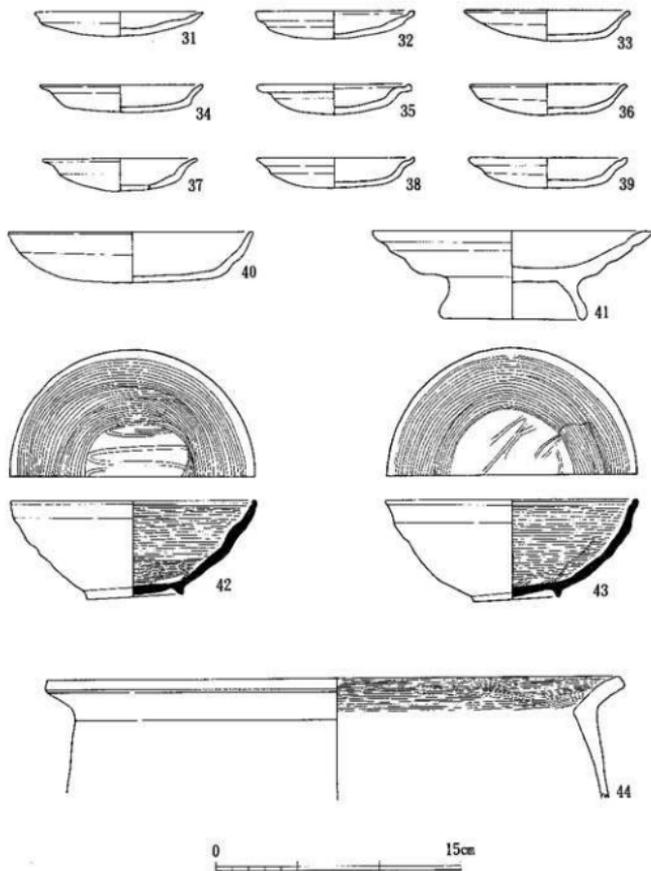


図4 包含層出土遺物

表1 土壌3出土土器分類表

種類・器形	個数	%
土師器	杯 1,629	2,182 69.4
	皿 292	
	甕等 261	
瓦器	碗 927	927 29.5
	鉢	
須恵器	鉢 12	12 0.4
	甕	
	碗	
	不明	
白磁	碗 8	14 0.4
	皿 3	
	不明 3	
黒色土器	碗 10	10 0.3
計	3,145	100.0

表2 褐色土出土土器分類表

種類・器形	個数	%
土師器	杯 6,052	8,333 63.9
	皿 1,165	
	甕等 1,116	
瓦器	碗 4,231	4,237 32.5
	皿 6	
須恵器	鉢 33	80 0.6
	甕 20	
	碗 5	
	不明 22	
白磁	碗 29	34 0.3
	皿 0	
	不明 5	
黒色土器	碗 356	356 2.7
計	13,040	100.0

土壌3の土師器皿は直径9~10cm、深さ1.2~2cm程度のもが多く、9・12のように口縁部が屈曲するものと、真っすぐにおわるものがある。特徴のわかる口縁部292点について検討したところ前者が34.6%、後者が65.1%で、ほかに粘土円盤の縁をおりまげた受皿状のものが0.3%である。杯は直径14~15cm、深さ3~3.5cm程度で口縁部を横ナデしている。瓦器碗は直径15~16cm、深さ5~6.6cmを測り、摩耗のため表面のヘラ磨きはほとんど観察できなかったが、内面は比較的いいねいな磨きがみられる。口縁部内側の沈線は927点のうち85.8%にみられる。須恵器鉢は小破片であるがすべて東播系である。

褐色土出土土器の法量は土壌3と大差ないが、土師器皿では32や35のように口縁部が屈曲肥厚するものが目立ち全体の51.6%を占める。真っすぐにおわるものは48.2%、受皿状のものは0.2%である。また、瓦器碗ではヘラ磨きがよいで器形に安定観がある。口縁部内側の沈線は871点のうち75.3%にみられる。また、土師器には、大きく外反する杯に高い脚の付くいわゆる足高台杯に相当するもの(41)と土師質の甕が出土している。

ここにまとめた土器だけを見ると、土師器皿の口縁部の特徴などから、筆者の編年で褐色土はⅠ-2期を土壌3はⅡ-1期を中心にする(橋本 1992「古代・中世の編年」『中世土器研究序論』)。褐色土出土土器が土壌3に比べやや古い傾向を示しているが、褐色土の未報告資料や灰褐色土からは時期の降る土器や陶磁器が出土している。図示したものは今回の調査の特徴を把握するために選んだものであり、層位的に矛盾する資料ではない。

土壌3と褐色土出土土器の破片点数を表1・2にまとめた。わづかながら黒色土器が出土しているが、混入品か同時期のものか断定できない。瓦器碗成立期にしばしばみられる現象である。瓦器碗の大半は桶葉型であるが、ごく少量の和泉型が混じる。土師器はすべて在地産である。瓦器、土師器で100%近くを占めるが、同時期の宮田遺跡・上牧遺跡では中国製白磁が1%前後を占め、須恵器・陶器類も一定量みられるのに比べ、陶磁器の少ないのが特徴である。とくに、常滑などの陶器類はほとんどみられず、これらが本格的に搬入される以前の様相を示している。また、煮炊具の羽釜や鍋もみられず、土師質甕の破片が目立つ。これも、中世土器として古い様相を示すものであろう。

天川遺跡は標高約6mの自然堤防上に立地するが、北大冠水路を隔てた東側の調査区では14世紀頃の土師器や瓦器碗も出土しており、居住区域を移動させながら11世紀から14世紀までの中世前期に営まれたものとみられる。低地部に立地する中世遺跡として上牧遺跡がある。最近、周辺で奈良時代の遺構も確認されているが、11世紀に改めて営まれるようになる。高槻市南部は淀川の形成した氾濫平野や後背湿地が広がり、各時代をつうじて遺跡は希薄であるが、11世紀に出現するこれらの遺跡は中世における開発や再開発を考えるうえで貴重な資料を提供するものである。

なお、三辻利一氏に依頼して瓦器碗と土師器皿の蛍光X線分析を実施し、別稿のとおり、分析結果と考察を掲載させていただいた。分析試料には天川遺跡だけでなく、上牧遺跡、宮田遺跡、柱本遺跡から出土した瓦器碗と土師器皿も加えた。今回の分析では瓦器碗、土師器皿ともに小単位の生産地で作られたものと推定されるが、柱本遺跡の瓦器碗のみが和泉型であり、分析結果からも異質な胎土で、まったく別場所の製品であると指摘されている。このような中世土器の蛍光X線分析の類例は少ないため、中世土器の研究成果との関係を検討していく第一歩としたい。

本稿の図面作成には川村雪絵氏の協力を得た。

II 文化財保護啓発事業

1 写生大会

・平成7年8月27日

史跡新池ハニワ工場公園において、一人でも多くの方々が文化財に親しむために、企画、開催した。テーマはハニワ窯や工房の様子、作業風景などを見て感じたことを描いてもらった。作品は審査を経て、入選作を選んだのち、応募作品のすべてを「小さな展覧会」会場で展示した。(参加者 30人)

2 小さな展覧会

・平成7年9月22日～24日

「ハニワってなあに？」をテーマに、市内出土のハニワや新池遺跡のハニワ窯の剥ぎ取り資料など、ハニワのすべてを展示した。(見学者 1,553人)

あわせて9月23日に、講演会「ハニワ工場について」を開催した。(参加者 40人)
講師 一瀬 和夫氏(大阪府立近つ飛鳥博物館)

3 歴史シンポジウム

・平成7年11月12日

史跡今城塚古墳附新池埴輪製作遺跡を整備した史跡新池ハニワ工場公園の開園を記念して、シンポジウム『いま真実を語るハニワたちー古代王権と今城塚古墳ー』を開催した。新池遺跡の調査成果をもとに、古代における三島の位置づけを論議し、今城塚古墳が真実の継体大王陵であると学問的に結論づけられた。また同古墳の今後の整備の方向性についても論議された。

コーディネーター 佐原 真(国立歴史民俗博物館副館長)

記念講演 門脇楨二(京都橘女子大学学長)

パネラー 水野正好(奈良大学学長)

原口正三(甲子園短期大学教授)

加藤晃規(大阪大学助教授)

森田克行(高槻市立埋蔵文化財調査センター次長)

コメンテーター ヨシトミヤスオ(京都精華大学教授)

入場者 576人

4 発掘調査現地説明会

・平成7年8月5日

高槻城三ノ丸跡(参加者 90人)

公園整備に伴い高槻城三ノ丸跡において発掘調査を実施したところ、戦国時代から江戸時代の溝や井戸などを検出した。なかでも、良好な状態で検出された江戸時代の導水施設は検出例の少ないものであり、現地説明会を実施した。

5 市立埋蔵文化財調査センター見学者数

総数 4,215人(延べ 99,737人)

6 新池ハニワ工場公園見学者数

総数 31,495人(工場館入館者19,075人)



1 写生大会



3 歴史シンポジウム



2 小さな展覧会



4 発掘調査現地説明会(高槻城三ノ丸跡)

Ⅲ 文化財の指定

重要文化財の保持者（人間国宝）の認定

山崎旭萃さん（本名 永井ハル）は平成7年5月31日に、無形文化財「琵琶」が重要無形文化財に指定されるとともに、重要無形文化財の保持者に認定されました。また、6月15日には高槻市から名誉市民の称号と名誉市民賞が贈られました。

山崎さんは明治39年3月5日、大阪市で生まれ、倉増旭陵に入門し10歳から筑前琵琶を始められました。筑前琵琶は明治20年代に初代橋流旭翁らが筑前盲僧琵琶を基本に、薩摩琵琶や三味線音楽を参考に作り上げたもので、現在は橋流旭会と同橋会の2派があります。

山崎さんは14歳で資格を得て、弟子を教え始めました。16歳で山崎旭萃会を創立し、会長として門下の育成につとめられました。19歳のときに、橋流橋会の宗家、初代橋旭宗の直門となり筑前琵琶の奥義を極められ、豪快な語りとバチさばきは、高い評価をうけています。昭和39年には、琵琶の普及のため琵琶演奏に詩吟をとり入れた琵琶吟楽を創始され、昭和42年には筑前琵琶日本橋会の最高位「宗範」につかれました。日本だけでなく、アメリカなど海外でも活発に活動し、後進の指導・育成にも尽力をされています。それらの活動に対し、昭和50年には大阪文化祭賞、昭和51年には芸術選奨文部大臣賞を受賞されたのを始め、昭和54年には芸術祭の放送部門とレコード部門で優秀賞を受賞されました。さらに、平成2年には大阪芸術賞を受賞されるなど、高い評価を得られています。

<指定理由>

(1) 重要無形文化財の指定について

名称 琵琶

重要無形文化財の概要

琵琶は、すでに奈良時代に中国からわが国に伝わり、雅楽の楽器のひとつとして、また宗教音楽のなかに伝承され、鎌倉時代から室町時代にかけて、もっぱら平家物語を語る「平曲」として盛んに演奏されるようになり、さらに安土桃山から江戸時代にかけて、九州薩摩地方で行われていた琵琶から薩摩琵琶が始まり、明治時代に同様に九州筑前地方の琵琶などをもとに筑前琵琶が起り、それぞれが継承されて今日にいたっている。

一般に琵琶は、基本的な演奏法に演奏者自身の工夫を加え、全体に抑制のきいた表現の中に、高い精神性をもとめられるもので、芸術上の価値が高く、また雅楽の楽器として、地域の宗教音楽として、さらに語りもの音楽として継承・発展してきたもので、ことに語りもの音楽としての琵琶は、近世の三味線音楽に大きな影響を与えたとされ、芸術史上もとくに重要なものである。

(2) 保持者の認定について

保持者氏名 永井ハル（芸名 山崎旭翠）

生年月日 明治39年3月5日

保持者の概要

同人は、小学校在学中から筑前琵琶の修業を始め、大正13年に橘旭宗に直接師事して、さらに琵琶の演奏技法の研鑽につとめ、以後長年にわたり琵琶の代表的な演奏者として活躍し、その演奏は昭和50年度芸術選奨文部大臣賞や同50年度芸術祭優秀賞の対象となるなど、いまや琵琶の技法に精通し、かつこれを高度に体现するにいたっている。

また、同人は、琵琶楽協会理事など斯界の要職にあつて、後継者の養成や琵琶の一層の普及・振興にも尽力し、同人の優れた演奏成果とともに、昭和55年に勲五等瑞宝章、平成2年大阪芸術賞、同5年松尾芸能賞優秀賞をうけている。



名誉市民賞を贈られた山崎さんと江村市長

IV 資料紹介

中城遺跡出土銭について

橋本久和

北昭和台町313-1の個人住宅建設工事中に出土した古銭については、『嶋上遺跡群20』に概要をまとめた。その後、銭種の判明したものもあり、改めて整理概要を紹介する。

出土古銭は60種類、5,901枚を数え(表2・図版10・11)、唐銭が544枚(9.2%)、五代十国銭が23枚(0.4%)、北宋銭が5157枚(87.4%)、南宋銭が147枚(2.5%)、高麗銭・金銭・元銭が13枚(0.2%)、不明17枚(0.3%)である。これとは別に、薬紐の残るものなど395枚(図版12)を固まりのまま保存した。

背文が23銭種、258枚に確認され、主なものをまとめた(表1、図1・2)。淳熙元宝(114)以前は星と月がみられ、会昌5(845)年に補鑄された会昌開元銭(紀地銭)には鑄造地を示す背文字がある。106の「洛」は河南府洛陽(河南省洛陽)、107の「潭」は江南道潭州(湖南省長沙)、108の「京」は京兆府(陝西省西安)、109の「潤」は江南道潤州(江蘇省鎮江)である。なお、101は表面の「宝」下に星がみられる。淳熙元宝から咸淳元宝(115~124)までの15銭種は「南宋番銭」といわれ、元号の数字を入れる。116の「捌」は八である。

表1 背文一覧表

銭種(初鑄年)	星	月	月星	字	数字	不明	計
開元通宝(621)	1	75				2	78
乾元重宝(758)		9					9
開元通宝(845)				ii			11
周通元宝(955)		2					2
宋通元宝(960)	1						1
元豊通宝(1078)		2					2
元祐通宝(1086)	1	4					5
紹聖元宝(1094)	1	5					6
淳熙元宝(1174)		6	7		23		36
紹熙元宝(1190)					10		10
慶元通宝(1195)					12	2	14
嘉泰通宝(1201)					10	2	12
開禧通宝(1205)					6	1	7
嘉定通宝(1208)					32		32
大宋元宝(1225)					1		1
紹定通宝(1228)					9		9
端平元宝(1234)					1		1
嘉慶通宝(1237)					4	1	5
淳祐元宝(1241)					8		8
皇宋元宝(1253)					2		2
開慶通宝(1259)					1		1
景定元宝(1260)					1		1
咸淳元宝(1265)					5		5
計	4	103	7	11	125	8	258

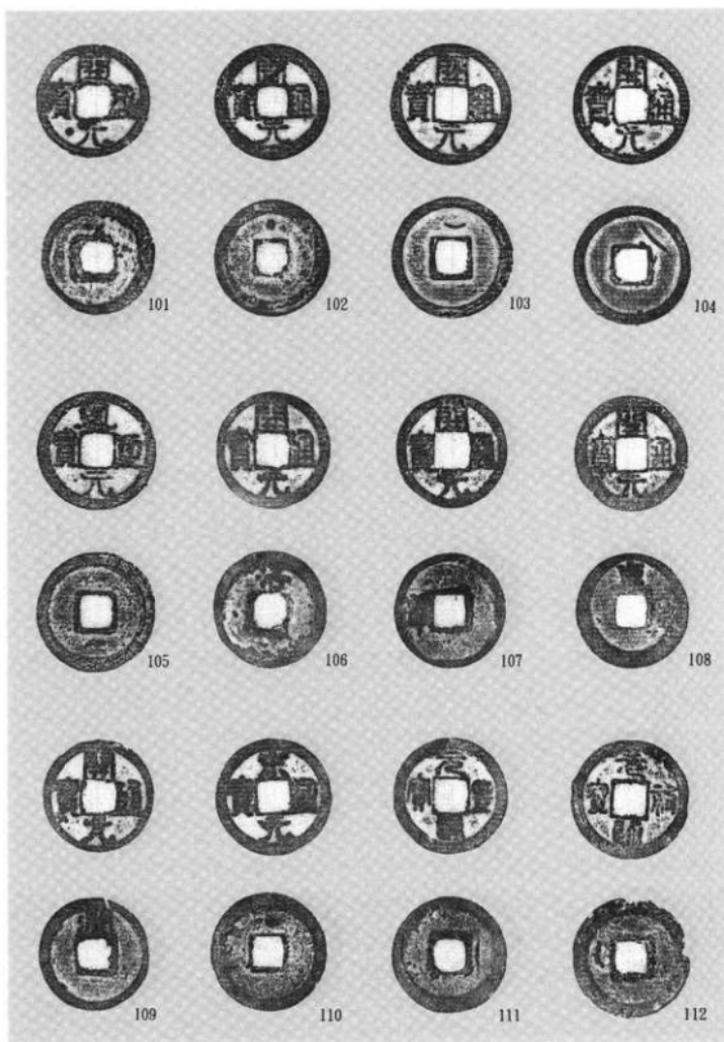


图1 中城道縣出土錢(1)

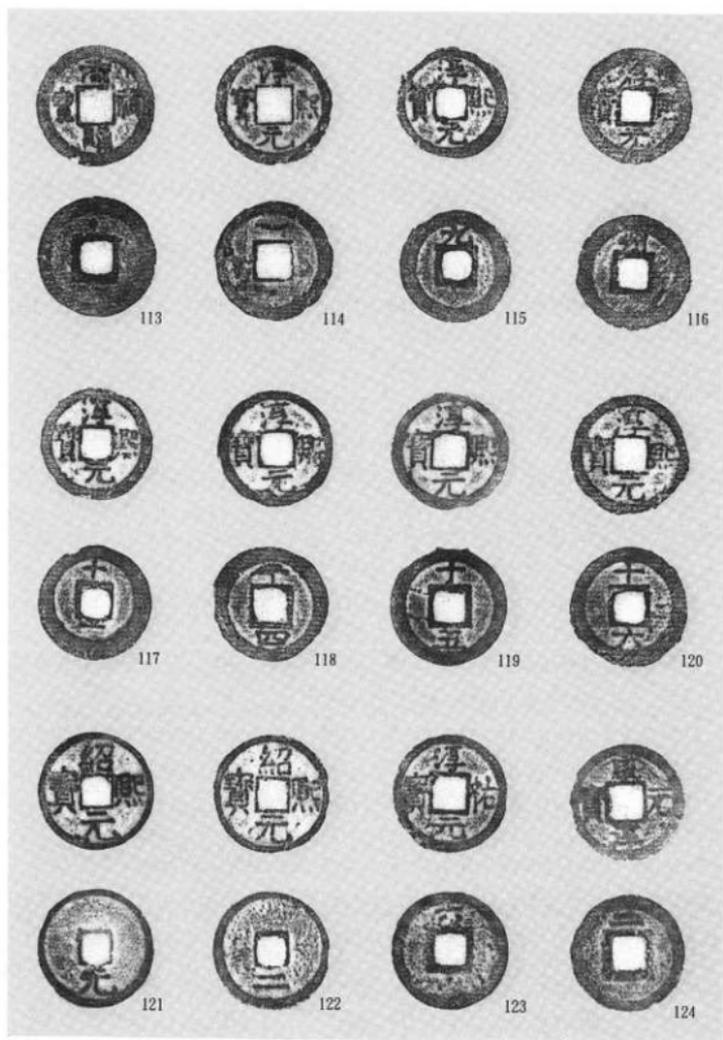


图2 中城遺跡出土錢(2)

中城遺跡出土の最古銭は唐の開元通宝、最新銭は元の至大通宝で、永井久美野の時期区分で第2期に相当し、鎌倉時代最末期から南北朝期に埋蔵されたものとみられる（『中世の出土銭』補遺Ⅰ）。類例として能勢町吉野遺跡、富田林市大伴出土例があげられる。大阪府下の出土銭は周辺部からの出土が多いとされてきたが、中城遺跡は比較的京都にも近く、また出土量も多い。今後の中世出土銭研究に有意義な資料を提供したといえる。

表2 中城遺跡出土銭の種類・初鋳年と枚数

No.	種 類	時代	初鋳年	枚 数	No.	種 類	時代	初鋳年	枚 数
1	開元通宝	唐	621年	508	32	紹聖元宝	北宋	1094年	253
2	乾元重宝	唐	758年	25	33	東国通宝	高麗	1097年	1
3	開元通宝	唐	845年	11	34	元符通宝	北宋	1098年	103
4	天漢元宝	前蜀	917年	1	35	聖宋元宝	北宋	1101年	229
5	乾德元宝	前蜀	919年	3	36	大觀通宝	北宋	1107年	88
6	漢通元宝	後漢	948年	1	37	政和通宝	北宋	1111年	244
7	周通元宝	後周	955年	2	38	政和通宝折二	北宋	1111年	2
8	唐國通宝	南唐	959年	8	39	宣和通宝	北宋	1119年	31
9	開元通宝	南唐	960年	8	40	宣和通宝折二	北宋	1119年	1
10	宋通元宝	北宋	960年	15	41	紹興元宝	南宋	1131年	1
11	太平通宝	北宋	976年	35	42	紹興元宝折二	南宋	1131年	1
12	淳化元宝	北宋	990年	57	43	正隆元宝	金	1157年	9
13	至道元宝	北宋	995年	101	44	淳熙元宝	南宋	1174年	36
14	咸平元宝	北宋	998年	110	45	大定通宝	金	1178年	2
15	景德元宝	北宋	1004年	141	46	紹熙元宝	南宋	1190年	10
16	祥符元宝	北宋	1009年	175	47	慶元通宝	南宋	1195年	14
17	祥符通宝	北宋	1009年	104	48	嘉泰通宝	南宋	1201年	12
18	天禧通宝	北宋	1017年	110	49	開禧通宝	南宋	1205年	7
19	天聖元宝	北宋	1023年	266	50	嘉定通宝	南宋	1208年	32
20	明道元宝	北宋	1032年	32	51	大宋元宝	南宋	1225年	1
21	景祐元宝	北宋	1034年	99	52	紹定通宝	南宋	1228年	9
22	皇宋通宝	北宋	1038年	782	53	端平元宝	南宋	1234年	1
23	至和元宝	北宋	1054年	67	54	嘉熙通宝	南宋	1237年	5
24	至和通宝	北宋	1054年	20	55	淳祐元宝	南宋	1241年	9
25	嘉祐元宝	北宋	1056年	76	56	皇宋元宝	南宋	1253年	2
26	嘉祐通宝	北宋	1056年	138	57	開慶通宝	南宋	1259年	1
27	治平元宝	北宋	1064年	194	58	景定元宝	南宋	1260年	1
28	治平通宝	北宋	1064年	18	59	咸淳元宝	南宋	1265年	5
29	熙寧元宝	北宋	1068年	582	60	至大通宝	元	1310年	1
30	元豊通宝	北宋	1078年	674	不 明				17
31	元祐通宝	北宋	1086年	500	合 計				5,901

熱ルミネッセンス年代測定法による今城塚古墳と太田茶臼山古墳の築造年代の推定

大阪市立大学理学部 三尾野 重 義
森 大 鬼

1 はじめに

わが国の国家形成の重要な時期が古墳時代と重なっており、特に大王陵（天皇陵）といわれるものと、『古事記』『日本書紀』の記述との関連でこれまで多くの議論がなされてきた。近年、古墳の廻りから出土する円筒埴輪の形状、透かし孔の形、タガの形、黒斑の有無等の要素から精緻な編年が完成している。しかし、絶対年代については考古学者の間でかなりの意見の違いがみられ、約100年の幅があるといわれている。古墳の築造年代が定まらなると、その古墳の被葬者を推定することは大変難しい。特に、円筒埴輪を基軸にした、いわゆる川西編年にしたがうと、わが国最大の大山陵古墳と誉田山陵古墳の築造年代が5世紀後半になると指摘されたことはまだ記憶にあたらしい。しかしながら門外漢の我々からみると文献史学者と考古学者はお互いに不確実な根拠を自己の立脚点にして『記・紀』の記事を解釈しているのではないかと思えてくる。これまで科学的な年代測定法で絶対年代を知ろうという試みがなかったわけではないが、大変難しく、成功していなかった。筆者等は熱ルミネッセンス年代測定法を精密化して、C14年代と比較することにより、過去の宇宙線の変動を知ろうと、測定装置や測定手法の改良を続けてきた。今回、近畿一円の円筒埴輪にこの手法を適用してみて、これらの手法の妥当性を検討してみた。

2 熱ルミネッセンス年代測定法とは

天然に存する結晶性の物質はなんらかの形の格子欠陥をもち、廻りの放射性物質からの励起でわずかづつではあるが、そこにエネルギーを蓄積していく性質を持っている。これに熱を加えることにより、可視光として読み取り、この蓄積線量を別途求めた年間線量で割って、その物体の焼成された年代を推定するのが原理である。これを式であらわすと、

$$\text{年代 (B・P)} = \text{備蓄線量} / \text{年間線量}$$

備蓄線量は図1に示してあるように、パソコンと組みあわせた測定装置で正確に測定できる。一般に土器や埴輪の場合、測定に使用する試料は石英粒を使用するが、原理的には制限はない。今回は次のような方法で試料を調製した。

- 1) 円筒埴輪の破片を銅片にはさみ、万力でつぶす。
- 2) ふるいで100ミクロン前後の石英を選び出す。

- 3) ネオジウムマグネットで磁性成分を除去する。
- 4) HCL (塩酸) と NaOH (水酸化ナトリウム) で洗浄する。
- 5) HF (フッ化水素酸) 20% 溶液で 30分 (20°C) エッチングする。
- 6) 実体顕微鏡下でチェックする。
- 5) の HF でエッチングするのは、自然界の放射線のうち α 線は線量の寄与は大きい、時間的変動が大きく且つ定量が難しいので、その分の寄与を除外する必要があるためである。

3 年間線量をどのように測定するか

熱ルミネッセンス法で年代を導き出すにはその試料の蓄積線量を正確に測定することはもちろん、年間線量の推定をどうするかという問題がある。たとえ現在の年間線量がなんらかの方法で求めたとしても、それが過去1000年、2000年間にわたって一定であったかどうかは保証の限りではない。普通は TLD (熱ルミネッセンス線量計、 CaSO_4 などの結晶に人工的に不純物元素を加えて熱ルミネッセンスの感度を上げてあるもの) を発掘された場所に1年以上埋設して γ 線と宇宙線の年間線量を、又試料の胎土に TLD を埋納して β 線の年間線量を推定する。しかし、今回我々は手法は同じでも過去のデータからと円筒植輪の相対編年からも年間線量を推定し、ほぼそれらが同じであることを確かめた。



図1 熱ルミネッセンス年代測定装置

4 新しい年間線量の推定方法

筆者らは過去20年間にわたって大阪平野から出土する考古遺物の熱ルミネッセンス年代測定を試みてきた。その結果気づいたことは、大阪層群の β 、 γ 線の量と宇宙線の量は年間 265 mrad （最近では単位が変更になり、 2.65 mGy とも書く）前後でほぼ一定であるということである。そして、幸いなことに提供された円筒埴輪はその特徴から川西編年の何期にあたるか明確にされていたので、それと線量との関係をグラフにしたのが図2である。この図から解くことは、年間線量 265 mrad の線の上に大阪平野出土の円筒埴輪のデータが一致するのである。そして川西編年の相対年代と伴出した銅鏡や武具等から推定された年代、即ちⅠ～Ⅲ期を300年から450年としⅣ期を450年～500年、Ⅴ期を500年以降と仮定すると古墳時代の約300年間で線量は 0.8 Gy 程であることが読み取れる。するとこれからも年間線量は 2.67 mGy ということがわかる。将来データが増えて年間線量が変わったとしても、それほどおおきな変更はないと思われる。従って、我々は年間線量を 265 mrad (2.65 mGy)とし、近畿一円同じ値であると仮定した。

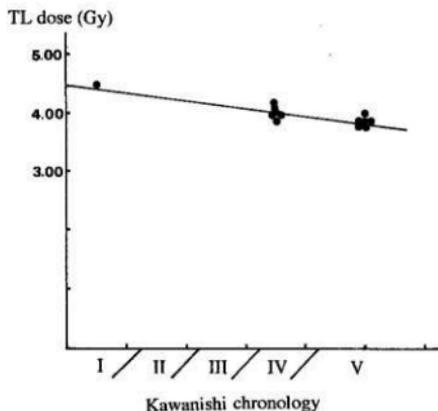


図2 円筒埴輪の蓄積線量と川西編年の関係

このグラフは川西編年が特に矛盾がないこと、その勾配から年間線量が 2.67 mGy であることが読み取れる。もちろんこの直線を延長して現在値は0になる必要があるので、勾配はそれほど自由度は無い。

5. 測定結果

このようにして求めた年代は

今城塚古墳 524 A. $D \pm 18$

太田茶臼山古墳 449 A. $D \pm 18$

であり、『古事記』の継体崩年527年、『日本書紀』の531年の記事を参考にすると、これまで指摘されているように年代的には今城塚古墳が継体天皇の陵墓の可能性が高くなり、現在継体陵に指定されている太田茶臼山古墳は5世紀中頃の古墳となる。この結果は逆に年間線量を2.65 mGyとした我々の仮定が極めて妥当な値であることを証明していると言えよう。さらに百舌鳥古墳群の一部を手がけ、下記のような結果がえられた。それは、大山陵の陪塚の円筒埴輪が、

源衛門山古墳 468 A. $D \pm 18$

塚廻り古墳 483 A. $D \pm 18$

収塚古墳 487 A. $D \pm 18$

の年代を示したのである。もちろん大山陵の主体部を手がけていないので即断はできないが、時代的には雄略大王の陵墓と考えて矛盾は無い。

6. おわりに

『記・紀』によると雄略大王即位から継体大王擁立まではまさに激動の時代であるが、また雄略大王の時代が古代史の画期であったことも明らかである。これまで大山陵が雄略大王の墓であるという説はないわけではないが、今回の測定結果はこれらの研究に寄与するものと確信している。いずれにしても、単独に大山陵だけの年代を出したとしても、とても結果を公表する自信はもてなかったであろう。大山陵古墳に関連する古墳の年代測定結果から類推される大山陵本体の推定年代は今城塚古墳と太田茶臼山古墳のデータがあっではじめてできる議論で、将来もし大山陵の年代を何らかの事情でずらす必要が生じた場合、必ず今城塚古墳と太田茶臼山古墳のデータも一緒に考える必要があり、これらのデータは一体のもので事はそう簡単ではない。それだけに、さらに百舌鳥古墳群や古市古墳群の年代測定を行うことによって『倭の五王』の時代を中心とする4、5世紀のバールをはぐことが期待できる。

天川遺跡出土瓦器碗・土師器皿の蛍光X線分析

奈良教育大学 三 辻 利 一

1 はじめに

これまでも、大阪府下や愛媛県下などの遺跡出土の中世瓦器碗、土師器皿の蛍光X線分析は行われたことがあるが、窯跡出土土器片が手に入らないこと、土師器皿の分析データのうち、Ca、Sr因子のバラツキが大きく、この原因が不明であることから、その分析データは十分に解説されていないのが、現状である。

本報告では、天川遺跡の他に数遺跡から出土した瓦器碗、土師器皿の胎土も比較した結果について報告する。

2 分析結果

全試料の分析値は表1にまとめられている。全分析値は岩石標準試料JG-1の各元素の蛍光X線強度を使って標準化した値で表示されている。JG-1による標準化値を%濃度やppm濃度表示に変換することは容易であるが、データ解説は通常、JG-1による標準化値で行われるので、ここではその表示法で分析値を示した。

ここからデータ解説に入るが、多変量解析法を使って計算するほど諸条件は整理されていない。したがって、表1のデータをプロットした分布図を作成し、データを読みとることとした。

はじめに、今回作成した全試料をプロットして分布図を作成し、瓦器碗胎土と土師器皿胎土にどのような相違があるのかをみてみた。

図1にはK-Ca分布図を示してある。K、Caはともに、土器、粘土、岩石中の主成分元素である。図1を一見して、横軸、すなわちCa量におおきなバラツキがあることがわかる。そして、瓦器碗と土師器皿を比較すると、土師器皿の方が瓦器碗に比べてCa量が多く、かつバラツキも大きいことがわかる。これに対して、縦軸、すなわち、K量には両者の間にほとんど差異がないことがわかる。

図2には瓦器碗と土師器皿のRb-Sr分布図を示してあるが、図1と同じように、瓦器碗に比べて土師器皿の方にSr量が多く、かつ、バラツキも大きいことが図1よりもっと明瞭にわかる。そして、Rb量は両者の間にほとんど差異はない。

この結果、瓦器碗胎土と土師器皿胎土を比較したとき、CaとSrに明らかに差異があることが判明した。RbとSrは土器、粘土、岩石中の微量元素であるが、これまでの分

表1 試料分析値一覽表

				K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na		
宮田遺跡	No.1	8-3812	瓦器 椀	11C	0.538	0.219	1.91	0.581	0.442	0.199	楠葉型
	2	3813	"	"	0.471	0.289	2.43	0.517	0.459	0.273	"
	3	3814	"	"	0.515	0.296	2.23	0.579	0.477	0.299	"
	4	3815	"	"	0.611	0.263	1.73	0.651	0.457	0.282	"
	5	3816	"	"							"
	6	3817	土師器 皿	11C	0.524	0.310	1.42	0.628	0.835	0.258	
	7	3818	"	"	0.442	0.187	1.60	0.572	0.394	0.198	
	8	3819	"	"	0.390	0.326	1.72	0.459	0.774	0.202	
	9	3820	"	"	0.531	0.279	1.14	0.635	0.976	0.240	
	10	3821	"	"	0.462	0.327	2.15	0.486	0.516	0.300	
上牧遺跡	No.1	8-3822	瓦器 椀	12C	0.498	0.282	2.00	0.601	0.530	0.186	楠葉型
	2	3823	"	"	0.573	0.278	2.68	0.701	0.497	0.179	"
	3	3824	"	"	0.599	0.273	1.84	0.734	0.592	0.251	"
	4	3825	"	"	0.568	0.285	3.49	0.635	0.545	0.157	"
	5	3826	"	"	0.486	0.208	2.53	0.612	0.492	0.136	"
	6	8-3827	土師器 皿	12C	0.538	0.435	2.79	0.591	0.817	0.267	
	7	3828	"	"	0.499	0.583	2.01	0.579	1.78	0.229	
	8	3829	"	"	0.512	0.491	2.63	0.527	1.08	0.241	
	9	3830	"	"	0.587	0.279	3.29	0.636	0.460	0.223	
	10	3831	"	"	0.607	0.295	2.19	0.693	0.634	0.268	
	11	3832	瓦器 椀	13C	0.508	0.253	2.25	0.689	0.483	0.169	楠葉型
	12	3833	"	"	0.498	0.228	2.54	0.685	0.466	0.199	"
	13	3834	"	"	0.505	0.252	2.22	0.590	0.507	0.216	"
	14	3835	"	"	0.522	0.229	2.50	0.632	0.445	0.153	"
	15	3836	"	"	0.590	0.220	2.09	0.668	0.463	0.221	"
	16	3837	土師器 皿	13C	0.549	0.369	2.01	0.558	0.903	0.245	
	17	3838	"	"	0.464	0.390	2.22	0.533	0.719	0.225	
	18	3839	"	"	0.521	0.440	1.86	0.599	0.971	0.248	
	19	3840	"	"	0.557	0.368	2.37	0.600	0.818	0.238	
	20	3841	"	"	0.459	0.252	1.71	0.591	0.447	0.206	
天川遺跡	No.1	8-3842	瓦器 椀	12C	0.546	0.302	2.54	0.563	0.491	0.205	楠葉型
	2	3843	"	"	0.520	0.390	2.30	0.556	0.650	0.272	"
	3	3844	"	"	0.479	0.339	2.99	0.475	0.533	0.238	"
	4	3845	"	"	0.451	0.373	2.75	0.448	0.550	0.262	"
	5	3846	"	"	0.631	0.232	3.05	0.634	0.444	0.152	"
	6	3847	土師器 皿	12C	0.397	0.389	2.47	0.437	0.790	0.225	
	7	3848	"	"	0.421	0.560	2.68	0.469	1.08	0.251	
	8	3849	"	"	0.448	0.452	2.05	0.448	0.848	0.415	
	9	3850	"	"	0.484	0.277	2.26	0.527	0.508	0.294	
	10	3851	"	"	0.487	0.305	2.43	0.521	0.565	0.273	
	11	3852	瓦器 椀	13C	0.561	0.304	2.10	0.720	0.601	0.196	楠葉型
	12	3853	"	"	0.542	0.285	2.44	0.690	0.570	0.163	"
	13	3854	"	"	0.594	0.284	2.61	0.674	0.554	0.180	"
	14	3855	"	"	0.582	0.225	2.35	0.699	0.528	0.188	"
	15	3856	"	"	0.425	0.225	2.45	0.512	0.586	0.179	"
柱川遺跡	No.1	3857	瓦器 椀	13C	0.403	0.152	2.63	0.416	0.390	0.313	和泉型
	2	3858	"	"	0.373	0.153	4.00	0.479	0.280	0.107	"
	3	3859	"	"	0.449	0.079	3.04	0.402	0.269	0.268	"
	4	3860	"	"	0.430	0.101	3.38	0.370	0.272	0.181	"
	5	3861	"	"	0.469	0.107	2.71	0.450	0.283	0.149	"

析データをみる限り、Rbは主成分元素Kと、またSrは主成分元素Caと正の相関性をもつ。このことはマグマから岩石が生成する過程、さらに岩石が風化して粘土が生成する風化過程で微量元素Rb、Srはそれぞれ、主成分元素K、Caと挙動をともにしたことを示している。K、Caのほとんどは岩石中の主成分鉱物、長石類に由来したものと推定されている。つまり、Kはカリ長石に、また、Caは斜長石に主として含まれていたものと推定されている。したがって、Rb、Srもそれぞれ、カリ長石、斜長石に含まれていたものであろう。このような場合、Ca-Sr分布図を作成すると、一定の勾配をもった直線上に沿って分析点は分布するはずである。そこで、図3にCa-Sr分布図を示してある。予想どおり、バラツキつつも直線に沿って点は分布するが、ここで注目するのは瓦器碗と土師器皿の分布する直線の勾配が異なる点である。もし、瓦器碗と土師器皿が同質の素材でできていて、ただ、Ca、Sr量だけが異なるとすれば、両者は一本の直線に沿って分布してよいはずである。それにもかかわらず、両者は図3に示すように、勾配の異なる別々の直線に沿って分布した。このことは、一体、何を意味するのだろうか。筆者はその可能性の一つとして、Ca、Srに富む何かを添加した可能性を考えている。瓦器碗と土師器皿も素材粘土は同じなのである。その証拠に図2、3で7点の土師器皿は瓦器碗に混じって分布しているし、図3では7点の土師器皿は瓦器碗と同じ直線に沿って分布している。この7点は瓦器碗と同質の粘土で作られたものであろう。これに対して、他の土師器皿のCa、Sr量の分布は大きくバラツキしており、Ca、Sr量に富む何かを添加した可能性を示唆する。この添加物はきちんと天秤で計って添加されたものではなく、適当量添加されたものと思われる。その結果が、図1、2ではCa、Sr量の大きなバラツキとして現れ、図3でも、直線沿いに大きくバラツキことになったものと思われる。この考え方が正しいかどうかは目下のところ確認できないが、もし、窯跡出土の瓦器碗、土師器皿の小片試料が大量に手に入れば、この考え方の正当性を立証することはできる。

図4にはNa因子を比較してあるが、瓦器碗に比べて土師器皿の方にNa量が多い傾向があることがわかる。

筆者は石川県小松市周辺の遺跡から出土した土師器の蛍光X線分析の結果を考古学者による胎土観察の結果と比較したことがある。そのとき、大粒の砂粒が多く含まれている土師器胎土にはCa、Sr、それに、Na量が多いことを見つけた。砂粒とは風化が十分に進んでいない岩石の破砕体である。粘土に比べて、岩石破砕体には通常、Na、Ca、Sr量が多い。これらの元素を含む長石類はK、Rbを含むカリ長石より風化速度が速いことが知られている。

以上のことから、瓦器碗と土師器皿の素材粘土は同質のものであろうと推察される。添

加された砂粒によって両者の胎土に相違がでたものであろう。これが今回得られた一つの知見であるが、中世の瓦器碗と土師器皿について一般的にいえることなのかどうか、今後、より広い範囲にわたって胎土分析のデータを比較する必要があるだろう。

つぎに、遺跡間で瓦器碗および土師器皿の胎土を比較してみよう。図5～10には各遺跡出土土器のK-Ca分析図を示してある。はじめに主成分元素を比較した訳である。また、各図には共通して一つの領域を描いてある。これは比較のために描いた領域であり、今回は上牧遺跡の瓦器碗を包含するようにして描いた。そうすると、12世紀代と13世紀代の瓦器碗の胎土はほとんど同じであることがわかる。宮田遺跡の瓦器碗も上牧領域に分布し、胎土が同じであることを示している。これに対して、天川遺跡の12世紀代の瓦器碗は上牧領域をずれて、胎土が異なることがわかる。しかし、13世紀代の瓦器碗は上牧領域に分布し、天川遺跡の瓦器碗は12世紀代と13世紀代で胎土が異なることがわかる。さらに、図10の柱本遺跡の13世紀代の瓦器碗の分布をみると、明らかに上牧領域をずれているばかりではなく、図5～9に示してきたどの遺跡出土の瓦器碗胎土とも異なることがわかる。したがって、全く別産地で作られた瓦器碗と考えられる。

次に、Rb-Sr分布図を図11～16に示してある。この図でも、比較のために上牧領域を描いてある。このような比較対照のための領域を描くことによって、他の遺跡出土の瓦器碗の胎土の違いを定性的にはあるが、よく理解することができる。

K-Ca分析図からも予想されるように、上牧遺跡出土の瓦器碗の胎土は12世紀代のものも、13世紀代のものもほとんど差異はなく、同質であることがわかる。これに対して、図13に示した宮田遺跡の瓦器碗も上牧領域の左下部分に偏在しているものの、一応、上牧領域に分布しており、類似した胎土であるといえよう。しかし、天川遺跡の12世紀代の瓦器碗は上牧領域の下側に分布し、上牧遺跡の瓦器碗の胎土とは類似しているものの、同じではないことを示している。しかし、13世紀代のものは上牧領域に分布し、12世紀代の瓦器碗とは胎土が異なることがわかる。これで、天川遺跡の瓦器碗はK-Ca分析図とRb-Sr分布図の両方で、12世紀代のものと13世紀代のものとは胎土が異なることが示された訳である。したがって、別場所で作られた瓦器碗である可能性がある。この点で上牧遺跡のものとは異なる。上牧遺跡では12世紀代の瓦器碗と13世紀代の瓦器碗の胎土はほとんど同じで、同じところで作られた可能性が高い。図16の柱本遺跡の瓦器碗は上牧領域を明らかにずれており、異質の胎土であることを示している。柱本遺跡の瓦器碗はK-Ca分析図でも、Rb-Sr分布図でも上牧領域を大きくずれており、どの遺跡出土の瓦器碗胎土とも異なる。全く別場所で作られた製品である。

このように、瓦器碗については天川遺跡の12世紀代のものを除いて、他の瓦器碗は上牧

領域にK、Ca、Rb、Srでほぼ対応しており、同一産地の製品である可能性がある。しかし、柱本遺跡の瓦器碗胎土だけは異なる。この点で、胎土観察によって、楠葉型、和泉型と2大別されていることとよく対応する。

これに対して、土師器皿はCa、Sr因子が大きくバラツキしており、胎土の比較は困難である。それでも、上牧遺跡のものは12世紀代と13世紀代で類似しているが、宮田遺跡、天川遺跡の土師器皿にはK、Rb量がやや少なく、上牧遺跡のものとは別胎土であることを示している。このことから、土師器皿は一つの生産センターで作られたものではなく、いくつかの生産地で作られた可能性もあるが、逆に、同じ場所で作られたが、添加剤の量によって、分析値はばらついたことも考えられる。今後の問題となる。

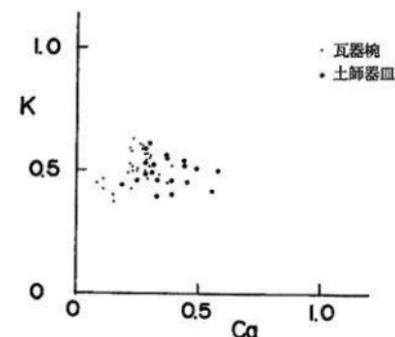


図1 瓦器碗と土師器皿のK-Ca分布図

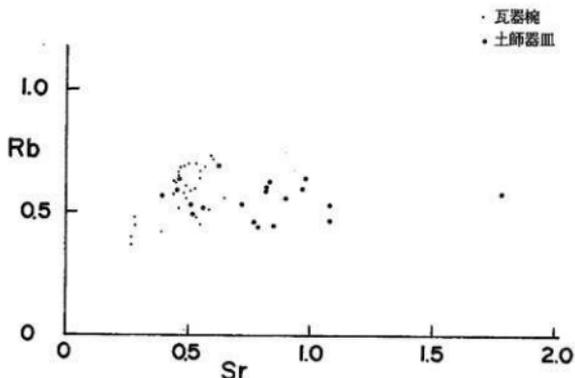


図2 瓦器碗と土師器皿のRb-Sr分布図

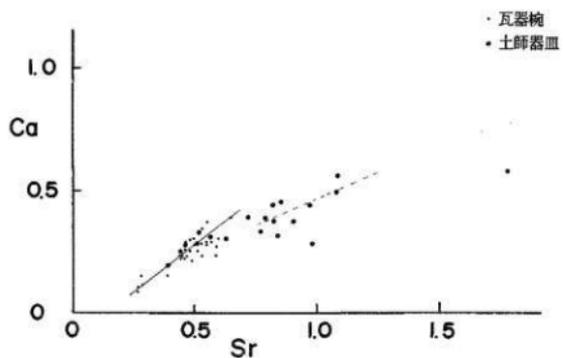


图3 瓦器碗と土師器皿のCa-Sr分布图

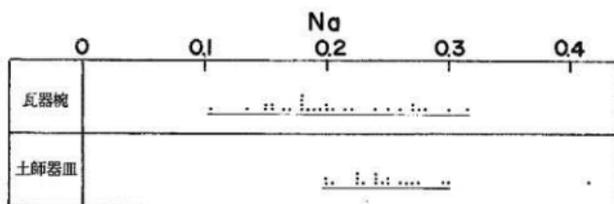


图4 Na 因子の比較

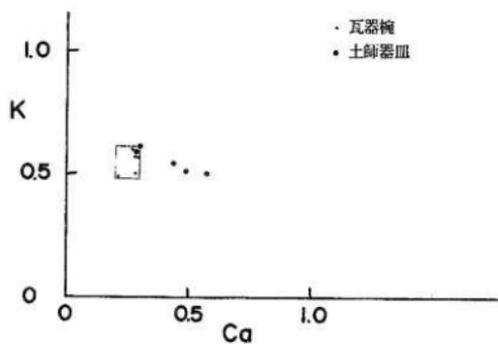


图5 上牧遺跡出土の12世紀代の土器のK-Ca分布图

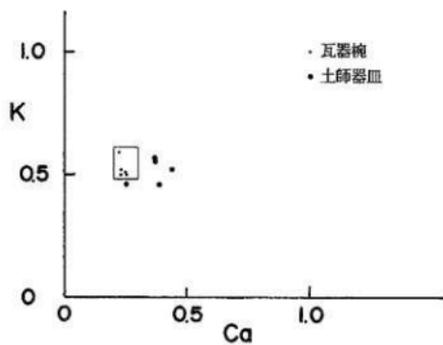


图6 上牧遺跡出土の13世紀代の土器のK-Ca分布図

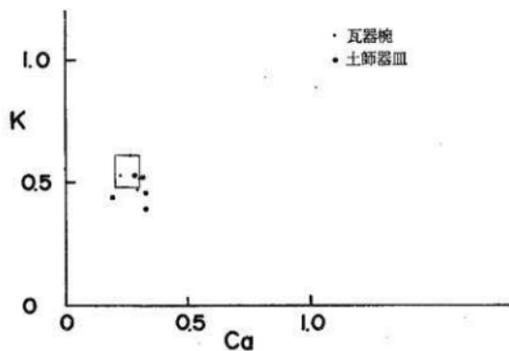


图7 宮田遺跡出土土器のK-Ca分布図

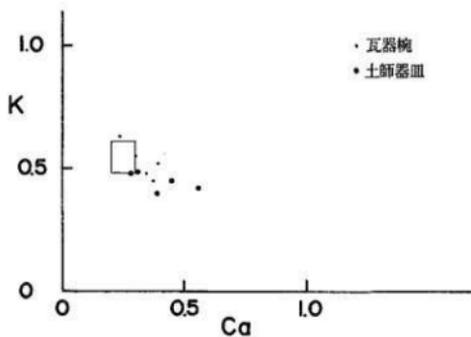


图8 天川遺跡出土の12世紀代の土器のK-Ca分布図

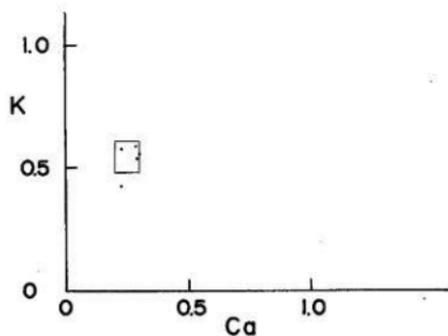


図9 天川遺跡出土の13世紀代の瓦器類のK-Ca分布図

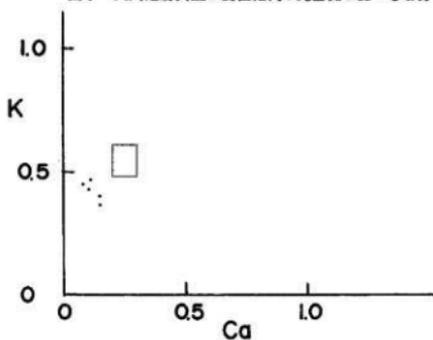


図10 柱本遺跡出土土器のK-Ca分布図

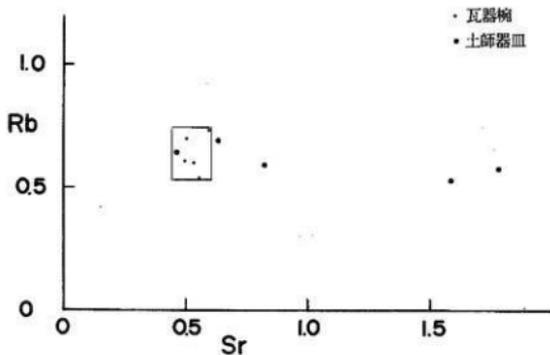


図11 天川遺跡出土の12世紀代の土器のRb-Sr分布図

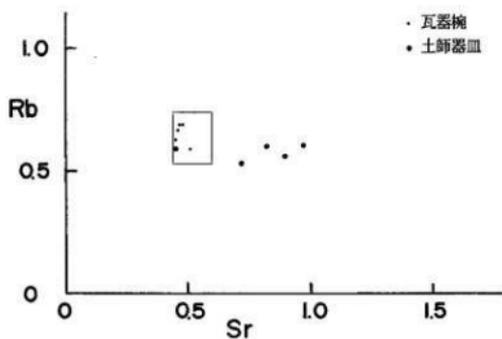


図12 上牧遺跡出土の13世紀代の土器のRb-Sr分布図

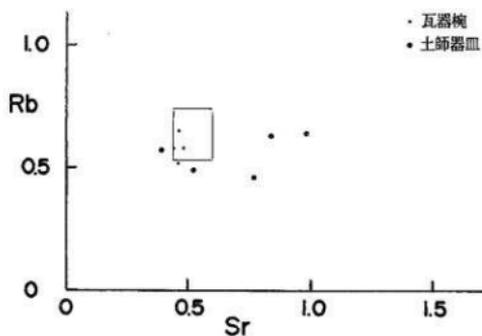


図13 宮田遺跡出土土器のRb-Sr分布図

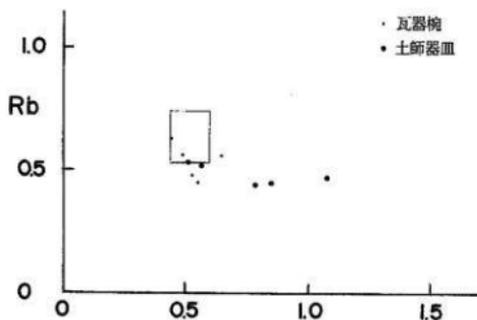


図14 天川遺跡出土の12世紀代の土器のRb-Sr分布図

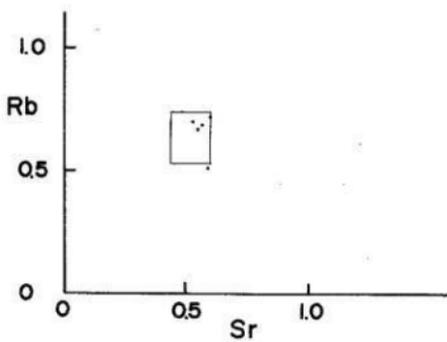


図15 天川遺跡出土の13世紀代の土器のRb-Sr分布図

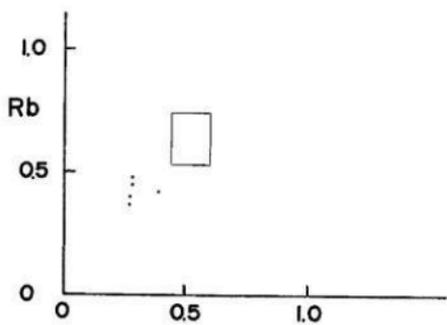


図16 柱本遺跡出土土器のRb-Sr分布図

あとがき

平成7年度には、念願であったシンポジウム『いま真実を語るハニワたち—古代王権と今城塚古墳—』を開催しました。シンポジウムでは、新池遺跡の調査成果をもとに今城塚古墳が真の継体天皇陵であることが明らかにされたのをはじめ、古代の三島地方の位置づけやまちづくりの史跡をどのように活用していくのかについても論議されました。その記録については、近日中に刊行できるよう作業をすすめておりますが、貴重な講演や提言をいただいた先生方に本書をかりて感謝いたします。

また、新池ハニワ工場公園の現地におきまして写生大会を、さらに「ハニワってなあに？」をテーマに、小さな展覧会と講演会を開催しました。小さな展覧会は発掘調査で出土した遺物に市民が接してもらい、文化財に対する理解が深まるように今回はじめて企画しました。多数の市民が見学に訪れ、今後も継続して開催できるよう努力いたします。

山崎旭幸さんが重要文化財の保持者（人間国宝）に指定されましたが、永年にわたる努力と自己研鑽の結果であり、わたしたちも教示されるどころ大であります。これからも健康に留意され、ご活躍されることを祈念いたします。

埋蔵文化財の調査では、高槻城三ノ丸跡と天川遺跡の調査成果を紹介しました。最近注目されている近世の遺跡については、これまでも高槻城跡でしばしば調査されていますが、今回の調査区では戦国時代から江戸時代の遺構や遺物が検出されています。とくに、今日の上水道にあたる導水管の発見は三ノ丸での生活を知ることのできる貴重な資料であります。天川遺跡の調査は低地部に位置する中世集落の実態を明らかにし、中世における市内南部地域の開発を知る手掛かりをあたえてくれました。

資料紹介のうち、中城遺跡から出土した古銭は銭種や量的にみて、近畿地方の中世出土銭の研究に欠くことのできない資料といえます。また、富田寺内町など高槻市西部における中世商業や流通についても問題提起するものです。

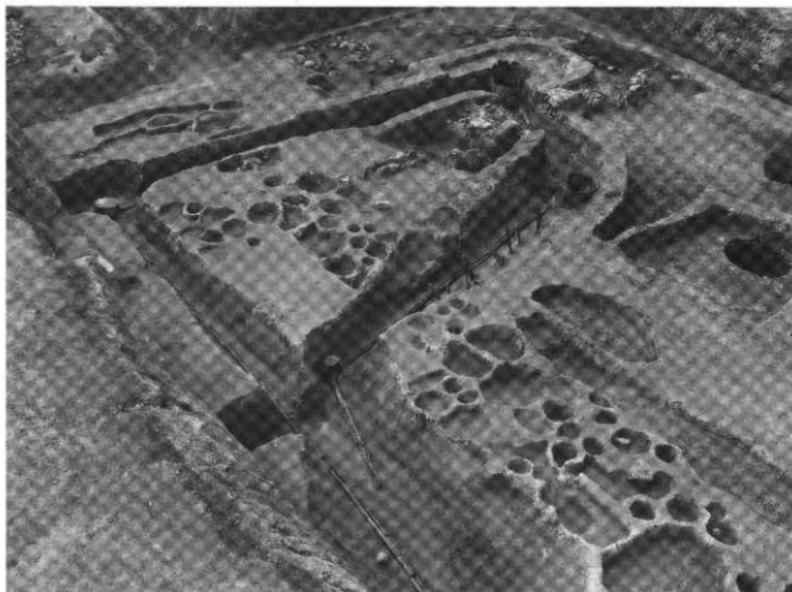
資料分析に関して2本の貴重な報告をいただきました。三尾野・森先生の熱ルミネッセンス年代測定法から今城塚古墳の実年代が明らかにされ、真の継体天皇陵であることが自然科学の研究からも実証されようとしています。前述のシンポジウムの成果とともにおいに注目されることです。また、三辻先生の蛍光X線分析ではこれまで想像の域をでなかった中世土器の生産実態が分かり、土器研究の成果とのつき合わせが課題となります。

平成7年度は整備された史跡や発掘調査の成果をどのように活用するかを大きな課題として事業を進めた結果、わたしたちの祖先の生活にじかに接することができました。このような体験を大事にしながら、今後も郷土の文化財を市民生活に生かせるように努力したいと考えています。

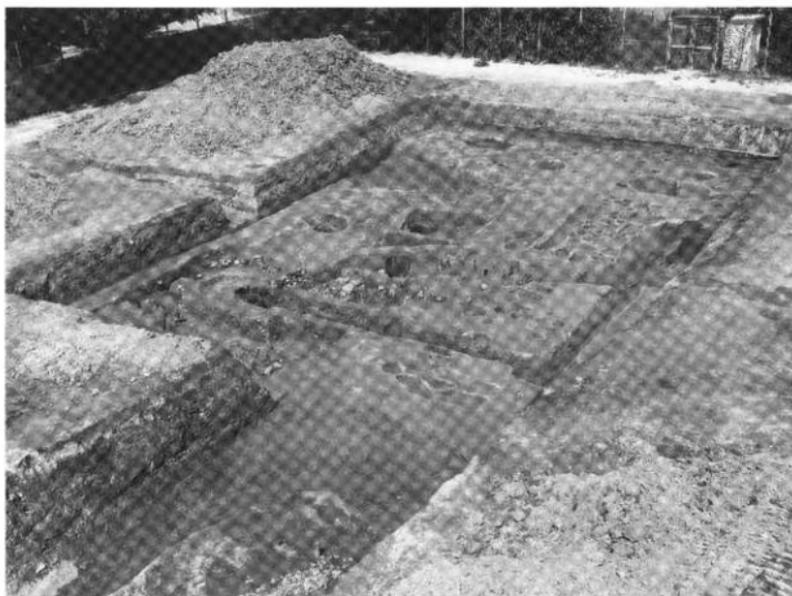
(橋本)



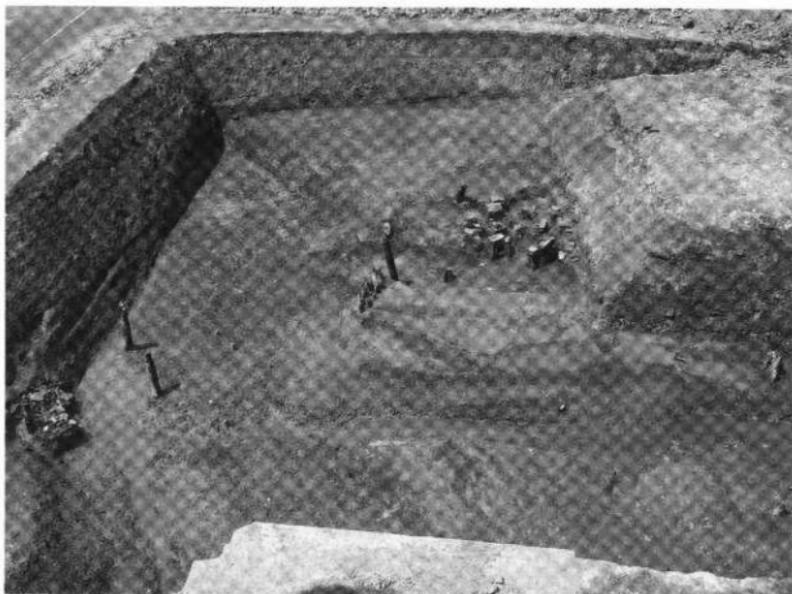
版



a. 高槻城三ノ丸跡 調査区全景（東側から）



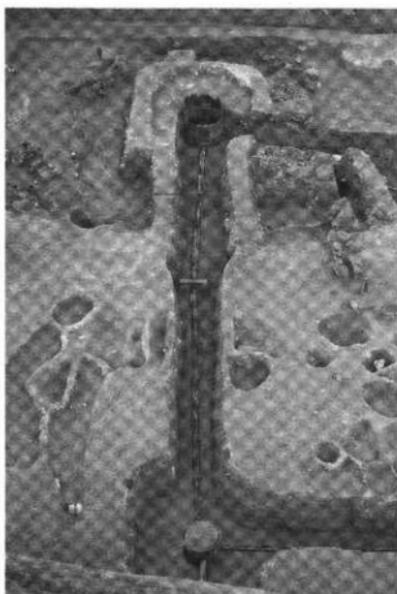
b. 高槻城三ノ丸跡 調査区全景（西側から）



a. 高槻城三ノ丸跡 溝1・3 (南側から)



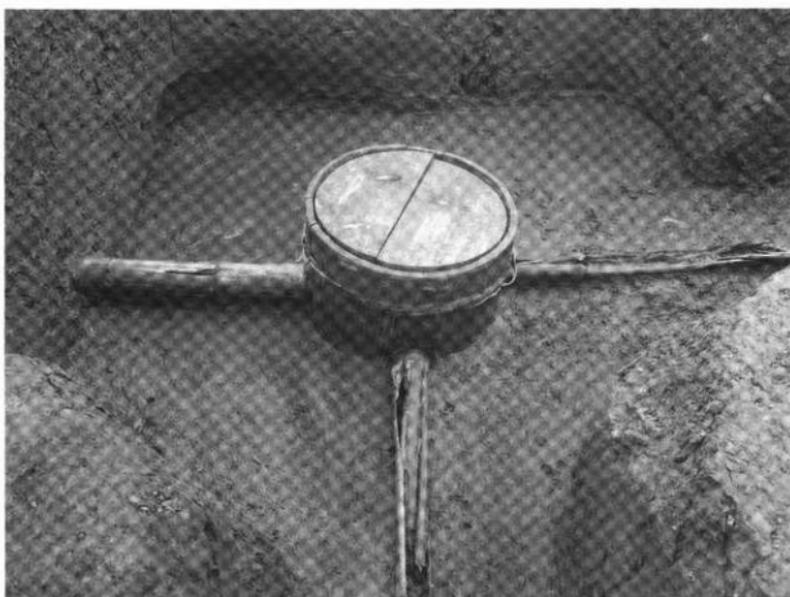
b. 高槻城三ノ丸跡 井戸1, 石敷2 (北側から)



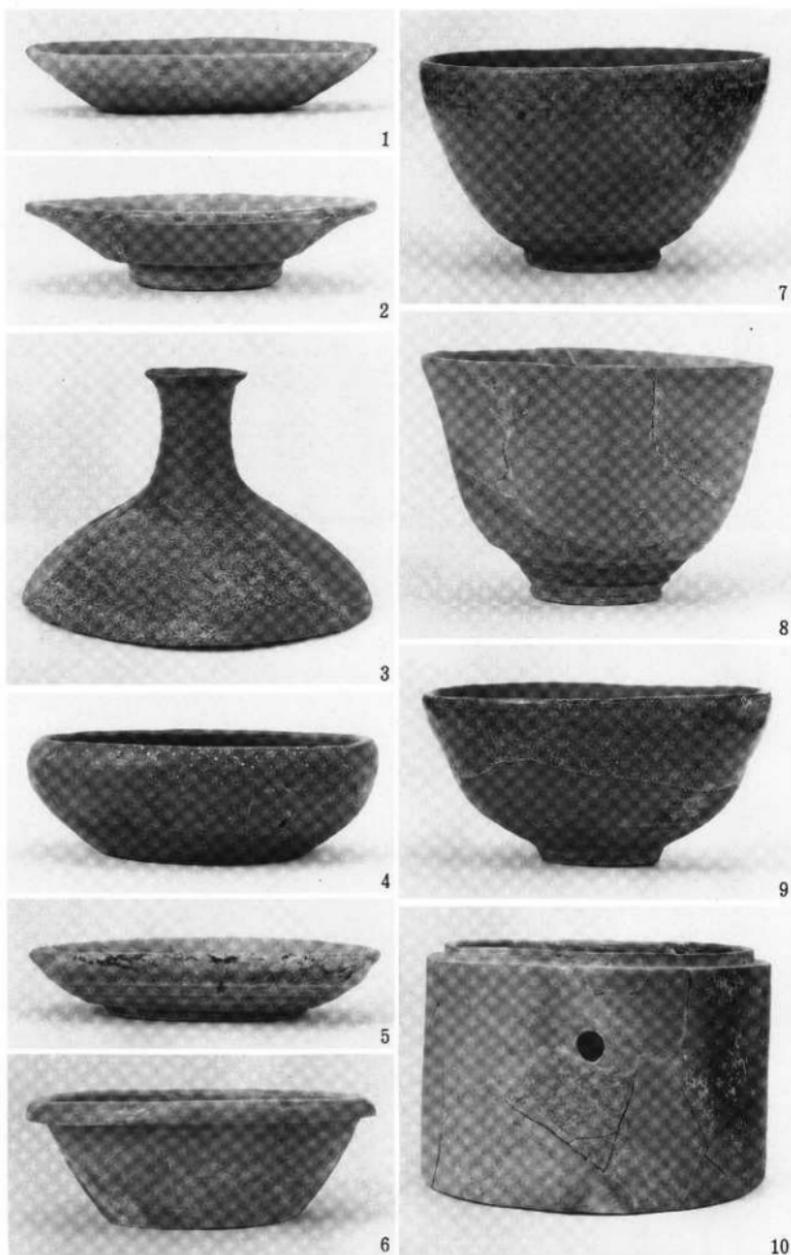
a. 導水施設 2 (南側から)



b. 導水施設 2 (北側から)



c. 桁 (埋溜) (東側から)



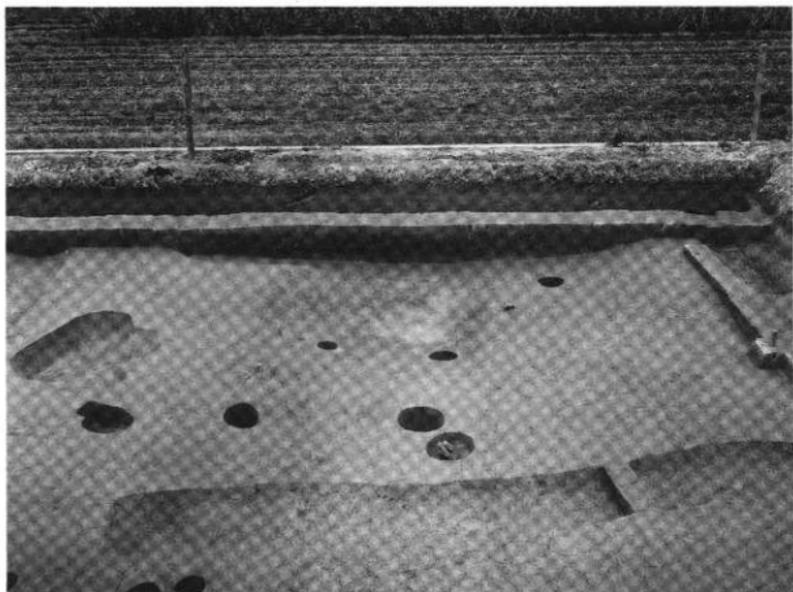
高槻城三ノ丸跡出土遺物（1～10）



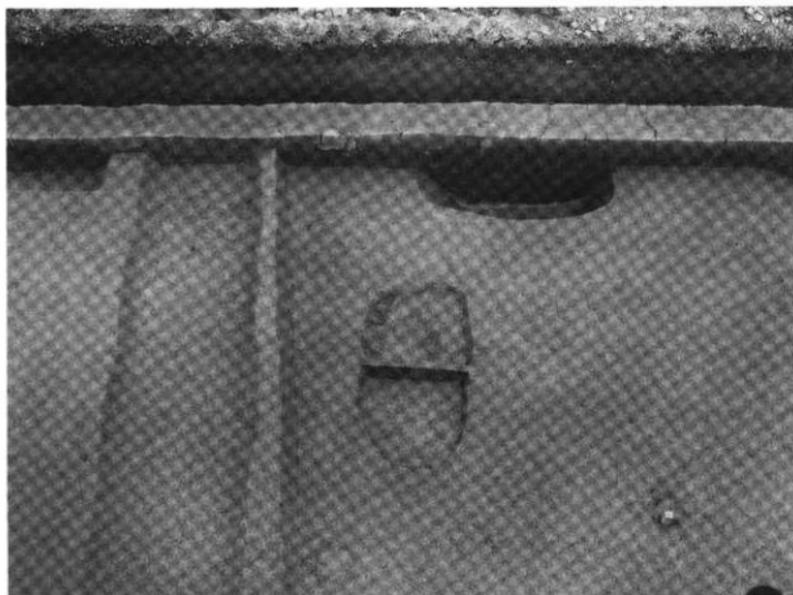
a. 天川遺跡 調査区西半部（北側から）



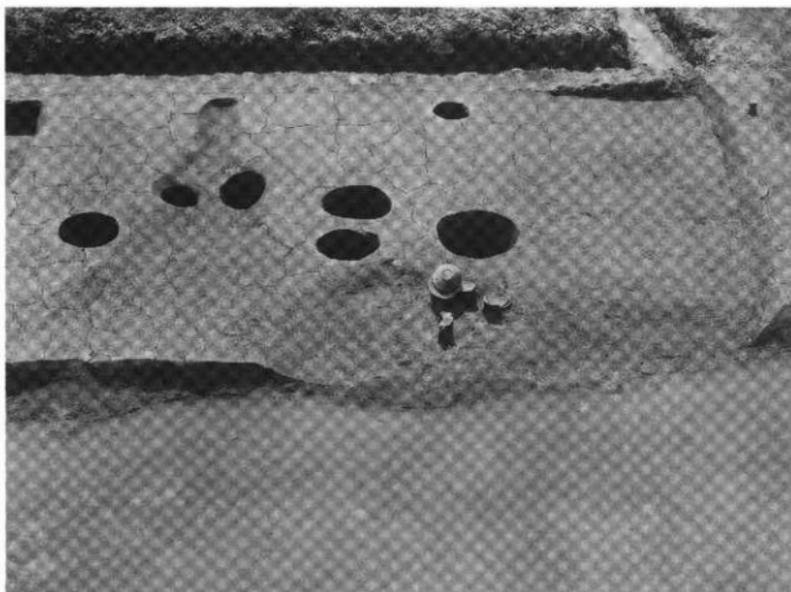
b. 天川遺跡 調査区東半部（北側から）



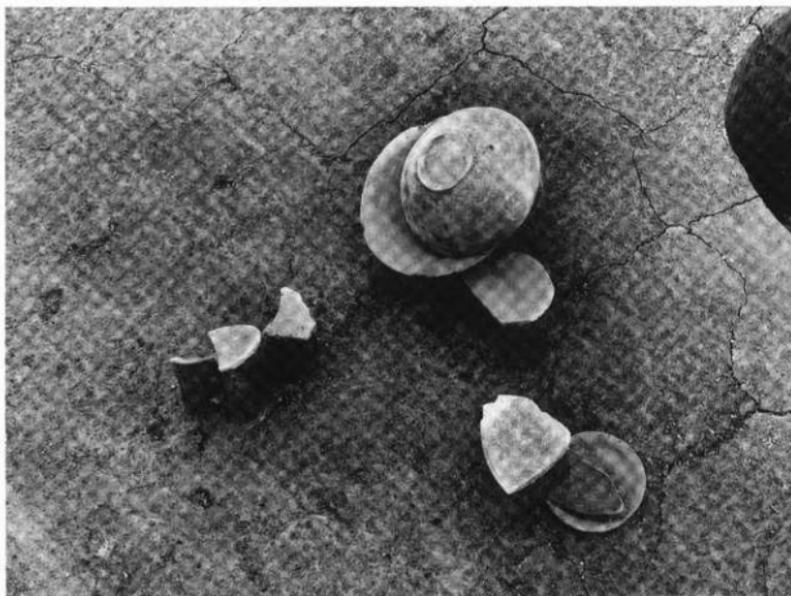
a. 天川遺跡 土壇3 (東側から)



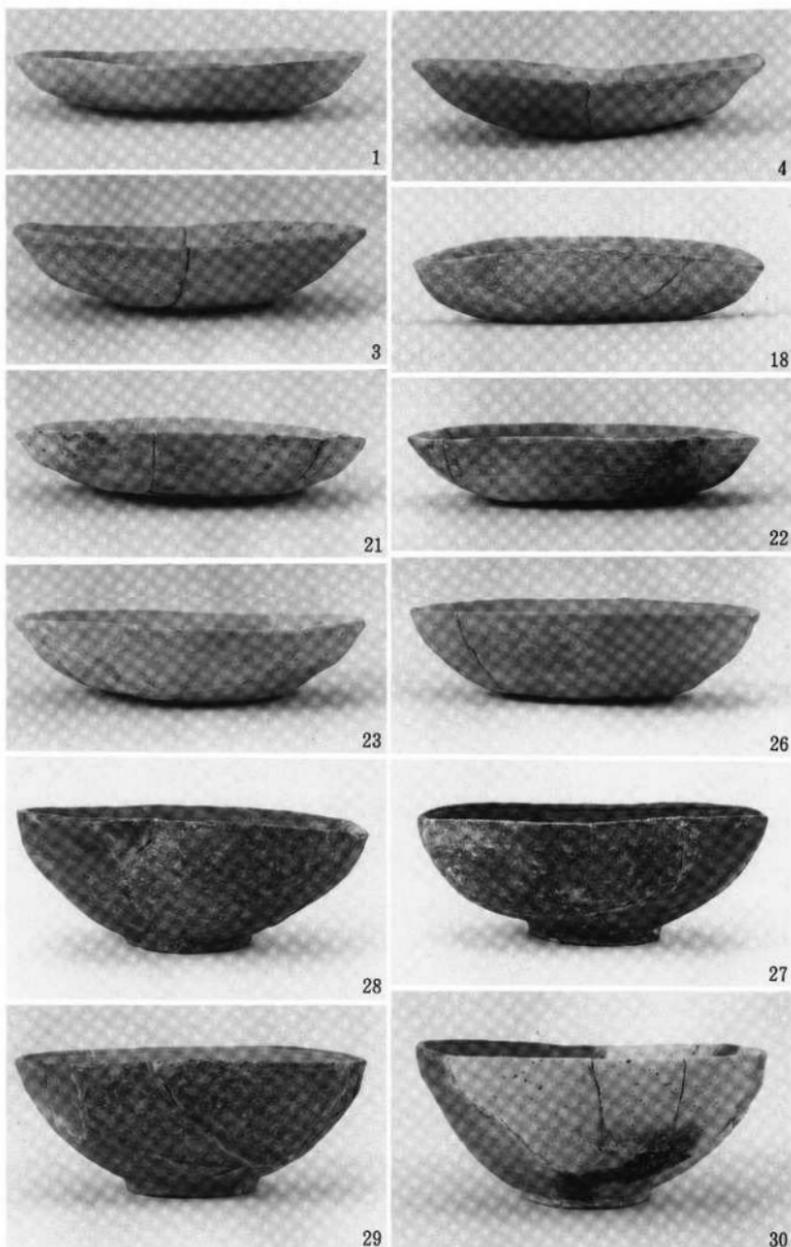
b. 天川遺跡 土壇1 (東側から)



a. 天川遺跡 調査区東北部（東側から）



b. 天川遺跡 調査区東北部遺物出土状況（北側から）



天川遺跡 土城 3 出土遺物



36



37



33



34



38



40



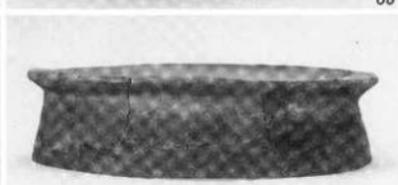
39



35



41



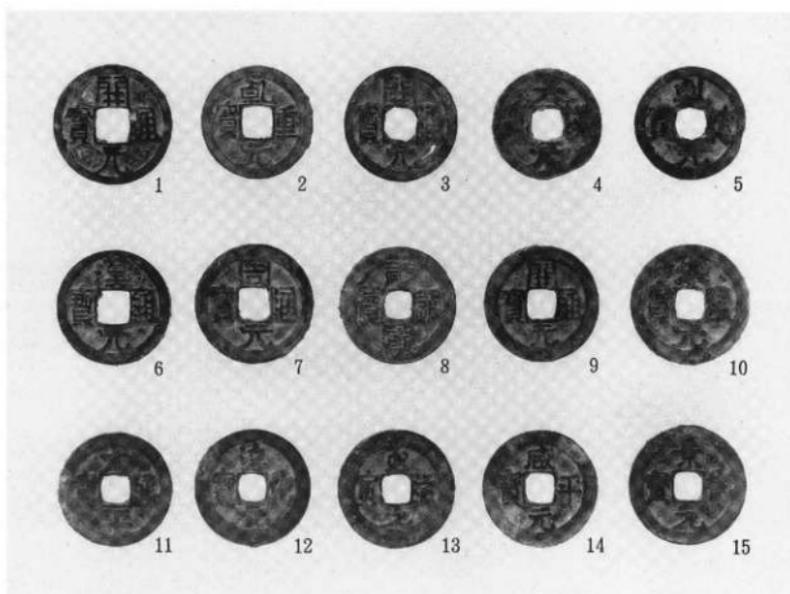
44



42

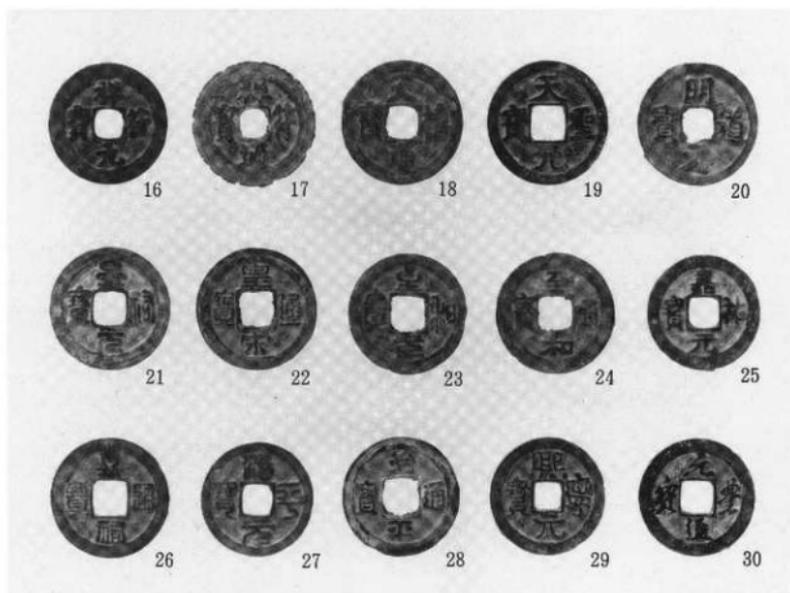


43



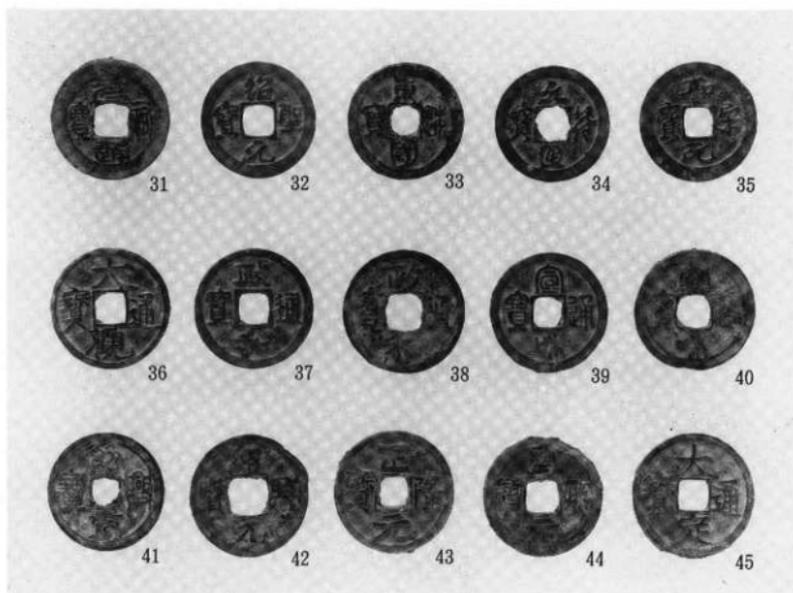
a. 中城遺跡出土銭(1)

約 1 / 1



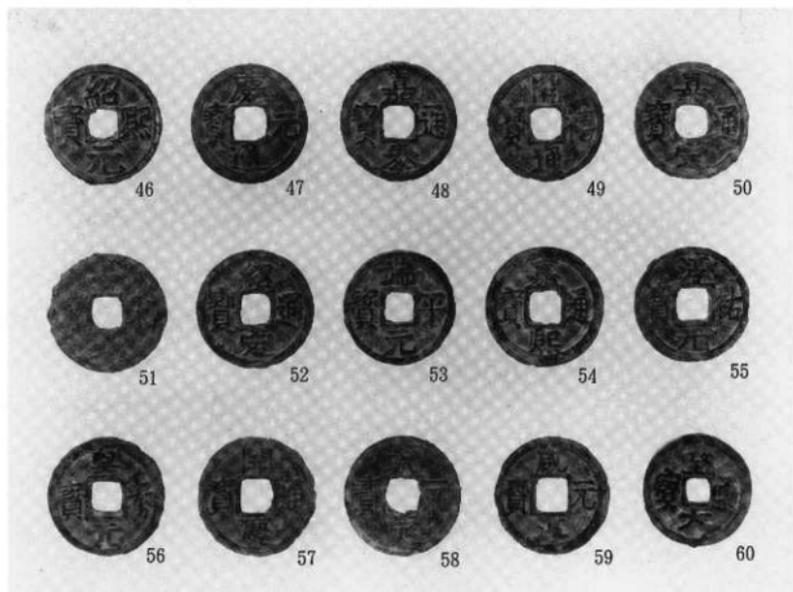
b. 中城遺跡出土銭(2)

約 1 / 1



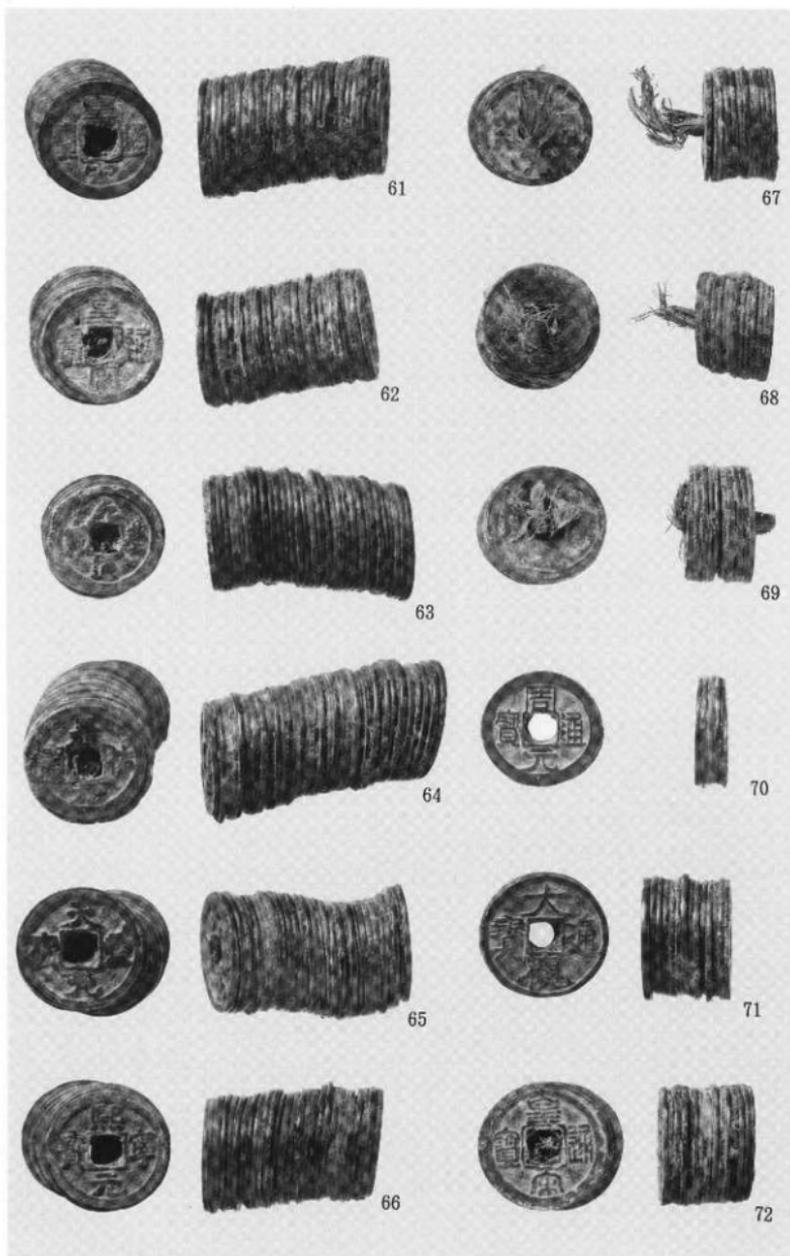
a. 中城遺跡出土銭(3)

約 1 / 1



b. 中城遺跡出土銭(4)

約 1 / 1



中城遺跡出土銭(5)

高槻市文化財年報 平成7年度

平成9年2月28日

発行 高槻市教育委員会
高槻市立埋蔵文化財調査センター
〒569-11 高槻市南平台5丁目21番1号

印刷 株式会社 邦文社
〒533 大阪市東淀川区大槻1丁目4番9号